

プロジェクト・メンバーがドイツに滞在した 2011 年 8 月 21 日～9 月 30 日の各日の記録である。執筆者名は記事の後に括弧に入れて示した。

### 8 月 21 日 (日)

■プロジェクト・メンバー中 5 名 (喜多、陳、寺田、伊藤、橋本)、アエロフロート・ロシア航空を利用し、ベルリン・シェーネフェルト国際空港に到着。2 名分の荷物がロストバゲージに遭う (2 日後に到着)。

22 時頃、ベルリン南西部リュエデスハイマー・プラッツ Rüdeshheimer Platz 近くのアパートに到着。比較的裕福なドイツ人家庭が多い地域であり、まさに閑静な住宅街という言葉が相応しい。住宅の合間には、休日を過ごすための各家庭の庭が点在しており、家族でガーデニングに勤しむ姿もたびたび見られた。ただし、少し歩くと 1970 年代以降に形成されたやや社会階層的に低い地域があり、文化面 (ワイン文化とビール文化など: 後述) の対比があるほか、内部をアウトバーンが貫いている高層マンションのような興味深い建築物が見られる。〔寺田〕



アエロフロート機 (モスクワ空港)



滞在先のアパート

### 8 月 22 日 (月)

■藤野教授宅で滞在中の行動予定を打ち合わせるとともに、滞在先の近くにあるリュエデスハイマー・プラッツという広場 (以下、広場) 周辺を探索する。この広場は田園都市構想の典型として 100 年前に造成され、周囲を取り囲む形で住宅街が形成された。

ドイツ北部の人々は歴史的に南部地方への憧れが強く、リュエデスハイマー・プラッツという名もまたヘッセン州リュエデスハイム・アム・ラインに由来しており、地下鉄リュエデスハイマー・プラッツ駅の構内にはリュエデスハイムの写真パネルが貼られている。こうした憧れを象徴するのが、この地域に浸透しているワイン文化である。リュエデスハイマー・プラッツ駅の門には葡萄があしらわれており、広場にも葡萄の房を持った女神像がある。



リュエデスハイマー・プラッツ

さらに、夏季期間中は広場内にワインを販売する小屋が設けられ、多数の椅子とテーブルも用意されている。周辺の人通りは必ずしも多いわけではないのだが、周辺に住む多数の人々が

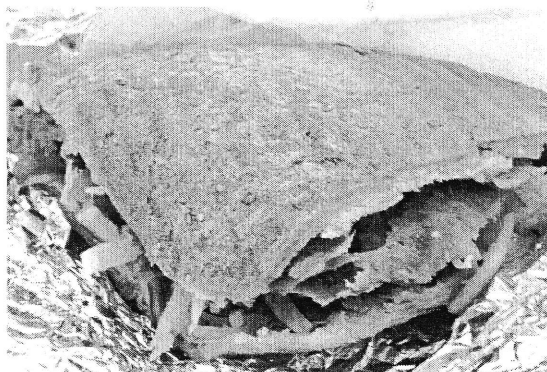
毎夜（平日であっても）集まり、ワインを片手に談笑する様子が見られた。平日は中年～高齢者層が多いように見受けられたが、8月28日のサマーフェスティバルに見られたように、若い世代の広場利用が無いわけではない。

一方、広場から少し離れたところには21日の項に記したような社会階層の異なる地域があり、そちらではビールやサッカー観戦が好まれるなど、文化的な差異がある。もっとも、広場でもフェスティバル（9月28日）の際などにはワインのほかにビールなども販売されている。

話が前後するが昼食はパンに肉と野菜を挟んだ中東地域の料理ドネルケバブ *Döner Kabap* で済ませた。トルコ系の多いベルリンにはケバブ店が多く、ボリュームがある上に野菜を摂れ、価格も安い（2ユーロ程度）ことから、非常に親しまれているファストフードの一つである。パンに挟まず、プレート料理として提供する店もあり、今回の滞在中、たびたび利用する機会があった。〔寺田〕



ワインを楽しむ人々



ドネルケバブ

## 8月23日（火）

■自由行動日。自由行動日には各メンバーが各自の関心に応じてベルリン市内を探索しているため、以下、自由行動日に関しては各メンバーの体験の一部のみを記載することにする。

■ベルリン・ミッテ地区を探索したあと、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 *Berliner Philharmoniker* のヴァルトビューネ *Waldbühne 2011* を聴きに行った。本来はすでに終了しているはずの公演であったが、雨で順延になっており、会場周辺でチケットを購入した（一般的な演奏会でも会場付近で個人的にチケットを売り買いする様子はよく見られる）ため、聴くことができた。ヴァルトビューネはベルリン西部の郊外にある森の中に建つ野外音楽堂で、ベルリン・フィルは毎年夏にここで演奏会を開いており、ベルリンの夏の風物詩の一つとなっている（日本でも各年のDVDが発売されている）。非常に人気があり、盛り上がりを見せる公演であるが、ヴァルトビューネの聴衆がそのまま通常の（すなわちフィルハーモニーで行われる）定期公演の聴衆となっているかどうかは、疑わしいところがある。この種の演奏会は、音楽を楽しむというより、お祭りのようにその場の雰囲気を楽しむという要素が強いためである。実際、この野外音楽堂は広大なため、ステージにかなり近い席でなければ生音を聴くことはほぼ不可能で、PA越しの音を聴くことになってしまう（かなり良い機器を使っているようではあったが）。日本でもこの種の演奏会は行われており（大阪フィルハーモニー交響楽団の星空コンサートなど）、比較検討が可能と思われる。〔寺田〕



ヴァルトビューネ



リッカルド・シャイー指揮ベルリン・フィル

### 8月24日(水)

自由行動日。

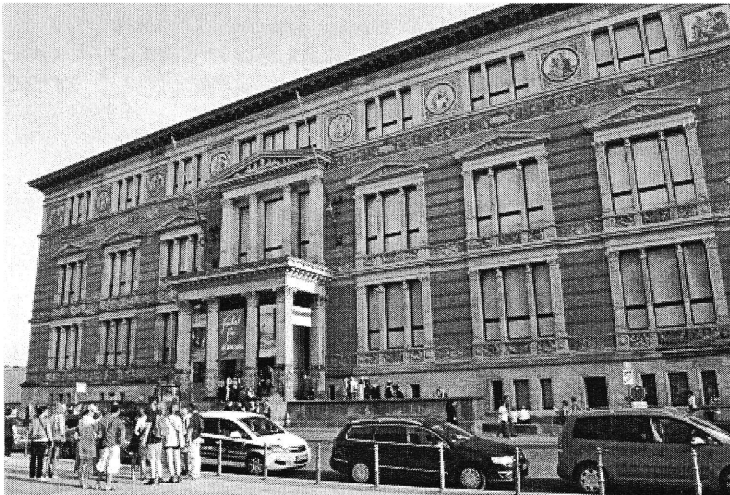
■橋本、喜多、伊藤と4人で、美術館・博物館が密集するベルリン・ミッテ地区の博物館島 Museumsinselにある、カール・フリードリヒ・シンケル Karl Friedrich Schinkel 1781-1841 が設計した旧博物館 Altes Museum に行った。1階は古代ギリシャ展、2階は古代ローマ展となっており、警備が厳しかった(理由不明、他館ではそれほど厳しくない)。ベルリン州立美術館・博物館で通用する年間パスを作った(学生料金で通常展のみ20ユーロ、特別展を含めると40ユーロ)。[陳]

■藤野教授の案内の下、ベルリン州立図書館 Staatsbibliothek zu Berlin を訪れた。入館には30日間10ユーロ、もしくは1年間25ユーロの利用カードを作る必要がある。有料化されたのは最近といい、オーストリアも有料化されているという。日本の場合、図書館法第17条で「公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」と定められており、公立図書館利用は無料とする原則があるので、ドイツの場合、有料化に際してどのような議論があったのかは興味深いですが、今回は調査しきれなかった。その他、ベルトルト・ブレヒト Bertolt Brecht 1898-1956 が主幸していたベルリナー・アンサンブル Berliner Ensemble、ドイツ劇場 Deutsches Theater Berlin、マクシム・ゴーリキー劇場 Maxim Gorki Theater Berlin などを見学した。

午後には書籍、CD、文具店を扱い「文化のデパート」として知られるドゥスマン Dussmann を訪ねた。印象的だったのは、欧米系の「コミック Comic」コーナーとは別に「マンガ Manga」コーナーが設けられており、日本人漫画家による最近の作品のほか、中国か台湾系の漫画家の作品が並べられていたことである。マンガに関心のあるドイツ人のために、マンガを読むための日本語入門書が出版されており、マンガ表現における明朝体とゴシック体の使い分けのようなかなか細かい部分についても説明されている。[寺田]

## 8月25日(木)

■午前中に藤野教授の研究室があるベルリン自由大学の国際研究所 International Research Center „Interweaving Performance Cultures“, Freie Universität Berlin を見学したあと、夕方はマルティン・グロピウス・バウ Martin-Gropius-Bau Berlin で 26 日より開催される「北斎展」のオープニング・セレモニーに出席した。日独交流 150 周年に関連するもので、日独の関係者が多数（正確な数は不明だが 1,000 名程度か）が訪れており、セレモニーでは大統領クリスティアン・ヴルフ Christian Wulff らが挨拶に立った。セレモニー後、来場者に先行して展覧会場が公開され、個々の作品のサイズこそ小さいが点数が多く、非常に充実した展覧会を観ることができた。〔寺田〕



マルティン・グロピウス・バウ



北斎展の看板

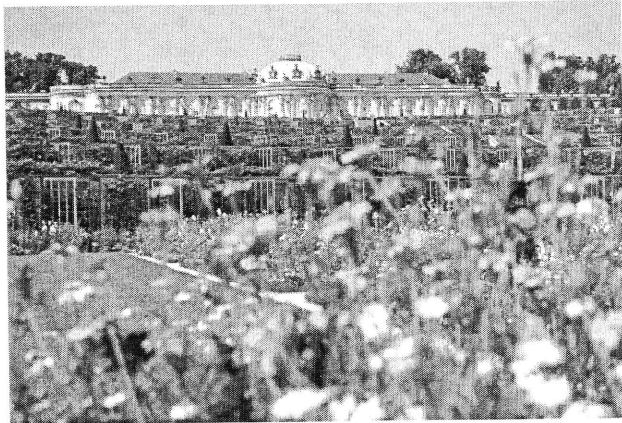
## 8月26日(金)

■ベルリン南西のブランデンブルク州ポツダムを訪問する。

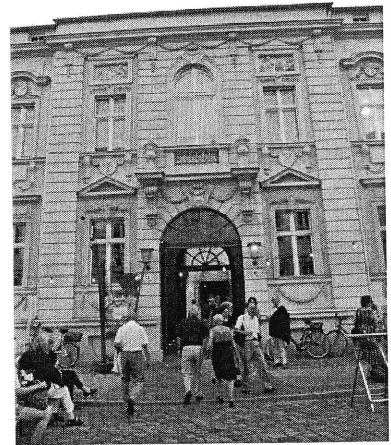
午後、プロイセン王フリードリヒ 2 世が 1745 年に造営した離宮サンサーシ宮殿（ユネスコ世界遺産「ポツダムとベルリンの宮殿群と公園群」の一部）を見学。

夜、市内のニコライザール Nikolaisaal Potsdam でアントネッロ・マナコルダ Antonello Manacorda 指揮カンマーアカデミー・ポツダム Kammerakademie Potsdam の 10 周年記念演奏会を聴く。カンマーアカデミー・ポツダムは、旧東ドイツ時代のオーケストラが財政上の問題から一旦解散したあと、再出発したオーケストラで、若手の演奏者が多い。プログラムは、メンデルスゾーン《真夏の夜の夢》より序曲、スケルツォ、夜想曲、結婚行進曲。ベルリオーズ《夏の夜》（ソロ：バーバラ・ヘンドリクス Barbara Hendricks）。ビゼー《アルルの女》より前奏曲、間奏曲、アダージェット、ファランドール。

ニコライザールではホワイエだけでなくホールの外にもスタンドがあり、軽食が取れるようになっている。また、ホワイエでは本と CD の販売が行われており、特に本の販売の重視は他のホールや美術館等でも見られた。ホールの中では、開演前にプロジェクターを用いてカンマーアカデミー・ポツダムのメンバー紹介や他のコンサートの案内を行うといった広報上の工夫が見られた。〔寺田〕



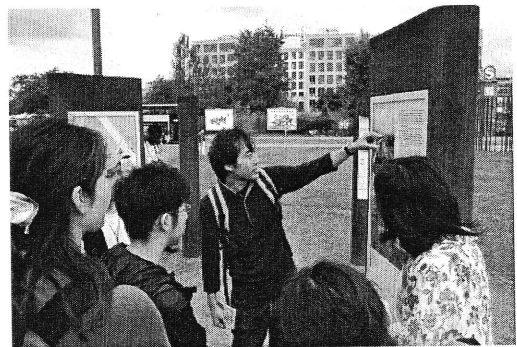
サンスーシ宮殿



ニコライザール

### 8月27日(土)

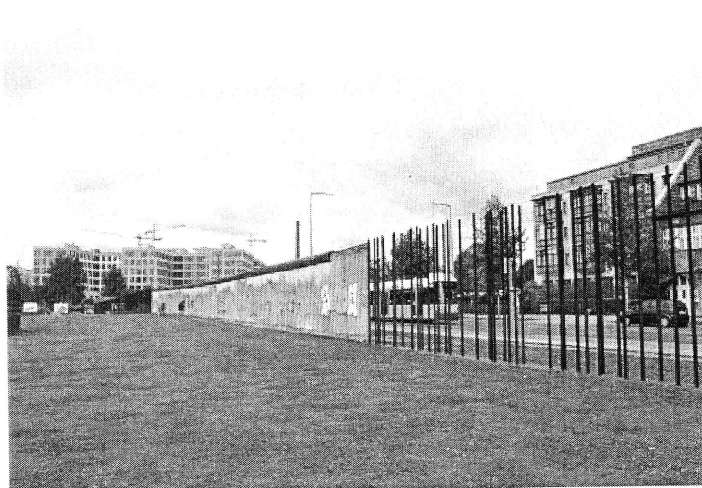
■ベルリンの壁があった地域を中心に、市内をベルリン在住のフリージャーナリスト、中村真人さん(『素顔のベルリン』ダイヤモンド社、2009年の著者。ブログ「ベルリン中央駅」<http://berlinhbf.exblog.jp/>)に案内して頂く。旧東側にある地下鉄ノルトバーンホフ Nordbahnhof は、東西分裂時代、電車は通過するが乗降できない(地下鉄は西側が運営していたため)いわゆる「幽霊駅」になっており、解説文や当時の写真パネルが構内に貼られている。



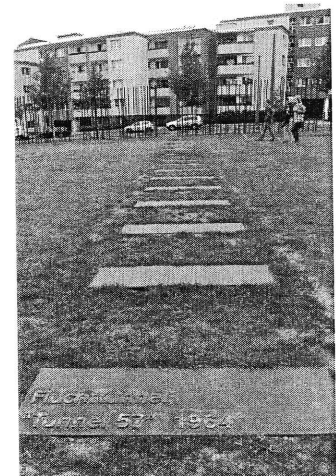
中央が中村さん

ベルリンの壁の一部が保存されている公園、ベルリンの壁記録センターGedenkstätte Berliner Mauer、さらに古いビール醸造所を改装した多様な文化の創造発信拠点、クルトゥーアブラウエライ Kulturbrauerei(文化醸造所の意)などを訪問した。

夜はヴァルトビューネでサシャ・ヴァルツ Sasha Waltz によるコレオグラフィック・オペラ《ディドとエアネス Dido and Aeneas》(作曲:ヘンリー・パーセル)を鑑賞した。演奏はベ



ベルリンの壁の一部が保存された公園



壁を越えるために掘られた  
抜け穴の位置を示すプレート

ルリン古楽アカデミーAkademie für Alte Musik Berlin。両者が協力して制作し、2005年に上演されて話題を呼び、日本でもDVDで観ることができる。舞台中央に水槽を置き、ダンサーが水の中で踊るなど様々な斬新な要素を持っている。ただ、ヴァルトビューネでは会場が大き過ぎた感は否めない（モニターが設置されていて舞台から遠い客席でも舞台上の様子が観えるようになってはいたが）。

なお、ヴァルトビューネは、もともとナチス時代の野外劇場、巨大集会場として作られた。ナチスの文化政策は、上から国民を総動員するだけでなく、国民の「自発的」参加の気分を醸成するように組み立てられていた。具体例の一つが、「ティング劇 Thingspiel」である。ティングとは古代ゲルマン世界にあった直接参加型の野外集会所で、ナチスはそれを森の中の野外劇、ティング劇として復活させた。今日のヴァルトビューネもティング劇を上演する場として建設された。ヴァルトビューネで今日行われる様々なイベントは、第三帝国時代を直接扱う内容でなくとも、必然的にこのような歴史的経緯に向き合うことになる。

余談だがこの時期のベルリンは気候が不安定で、この日は8月にも関わらず非常に寒かった。ドイツ人はそれを心得ていて、冬場と同じような防寒着を持参している人が多かった。ヴァルトビューネで鑑賞する場合は注意が必要である。〔寺田〕

## 8月28日（日）

自由行動日。

■橋本とDalemndorfにあるベルリン自由大学の植物園に行った。世界中の植物が充実しており、ベルリンは年間平均気温が低いにも関わらず、大規模な温室で熱帯気候の植物やアジアの植物が多く栽培されている。当日、園内にてアートマーケットが開催されていた。〔陳〕



アートマーケット

■リュードスハイマー・プラッツのサマーフェスティバルに行く。フェスティバル自体は毎年行われているが、今年は広場の造成から100年目なので盛大に行われた。この地域は日常的に人が集まる場所としての広場を中心に作られたヨーロッパ型近代市民社会を表象する街の典型例であり、ハード（広場）とソフト（コミュニティ）の両輪が整えられている点で、ベルリンの中でも「優等生」と言える。この日は家族連れもかなり多く、幅広い世代が集まっており、子どもが遊ぶスペースが充実していた。

広場周辺に出ている多数の出店は、個人が自宅の古いものを集めたような店から「商売」をしている店まで様々で、売られている品物も花、骨董品、家具、ジャム、アクセサリ、アロマグッズ、バッグ、衣類、食器、絵画や写真作品、民芸品、本、レコード、おもちゃなど多岐に亘り、飲食店も出ていた。前述のようにこの広場ではワインが飲まれるが、この日はビールや他の種類の酒も販売されていた。また、新聞社のブース（購読の案内をしたりする）、グリーンピースなどの団体ブース、観光会社や自動車用品（ベビーシート）のブースなどもあり、参加者の多様性が伺えた。

広場に仮設されたステージでは出し物が行われ、訪れたときは地元の中学生もしくは高校生

によるバンド演奏が行われていた。

こうした地域イベントは、NPO (Verein) として活動している住民自治組織 RÜDI-net が行っている (<http://www.netzwerk-ruedesheimerplatz.de>)。地域の歴史の掘り起こしと共有も熱心に取り組まれており、広場内では地域史とドイツ史を重ね合わせたパネルや、古地図、古写真の展示が行われていた。〔寺田〕



フェスティバル当日の広場



地域史とドイツ史に関するパネル展示



出店



子どものための遊具スペース

## 8月29日(月)

自由行動日。

■午前中、ベルリンの壁博物館 Mauermuseum / Museum Haus am Checkpoint Charlie に行った。料金は9ユーロで、民間のミュージアムのため他の施設より少し高い。昼食は、ドイツ語のメニューが読めないで、中華料理店で中国語であんかけチャーハンと緑茶を注文した。その後、グッゲンハイム美術館 Deutsche Guggenheim Berlin に行った。月曜日は無料で入館できたが、せつかく年間パスを作ったので、少し損をした気分になった。

さらにドイツ歴史博物館 Deutsches Historisches Museum に行った。この施設は年間パスの対象外(理由不明)だが、閉館1時間前から無料で入館することができた。展示物が多くて、時間が足りないで、1階の展示しか見ることができなかった。後でリベンジしたいと思ったが、なかなか時間が無く、残念だった。

最後は、大型書店・文具店のドゥスマン(前述)に行った。音楽、専門書、デザイン感が良い文具まで品揃えの良い施設だった。ベルリンの滞在期間中に何度も利用した。〔陳〕

■ベルリン・フィルの本拠地であるフィルハーモニーは毎日バックステージツアーを行っているが、8月はオーケストラにとってはオフシーズンであり、フィルハーモニーも工事のため、開館してはいるがツアーは行われていなかった。受付の近くの棚にはベルリンの様々なオーケストラのパンフレットが置かれていた。日本の場合、演奏会ごとにチラシを作って大量に配布する広報手段をとることが多いが、ドイツの場合、個々の演奏会のチラシを作ることはあまり無く、年間の演奏スケジュールを数百ページの立派な冊子にまとめて無料で配布している。聴衆の情報収集・選別能力を信頼しているということであろう。とはいえ、年間スケジュールでは単行本程度の厚さになってしまうので、持ち運びのために小さなものも作られてはいる。ベルリン・フィルを例にとると、年間スケジュールの他、月ごとの演奏会案内、教育プログラム案内、ポケットに入るコンパクトな折り畳み式年間スケジュールと、利用者のニーズに合わせて様々な種類を用意している。

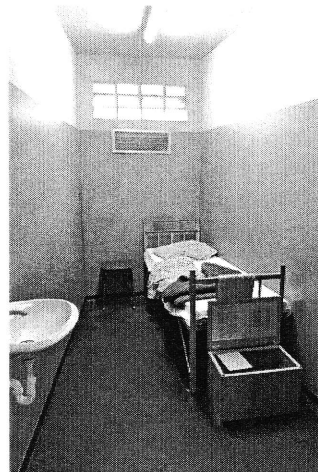


フィルハーモニー

夕方は東ドイツ時代の人々の生活を紹介します DDR 博物館 DDR Museum に行った。マルクスやレーニンの目が動く肖像画が掲げられるなど、東ドイツの「暗さ」や歴史的教訓を強調するよりも、エンターテインメント性をより重視した、テーマパークのような施設になっている。例えば実物展示や体験展示が多く、トラバント（東ドイツでポピュラーだった小型乗用車）乗車体験、当時のラジオ放送や映像の視聴、尋問室や刑務所入室などがあり、情報を見る・聴くだけでなく五感で受け止めることができるように配慮されている。教育目的のように見えるが、家族連れよりも観光客と思われる人のほうが多かった。〔寺田〕



DDR 博物館



収容所室内の再現展示

## 8月30日(火)

自由行動日。

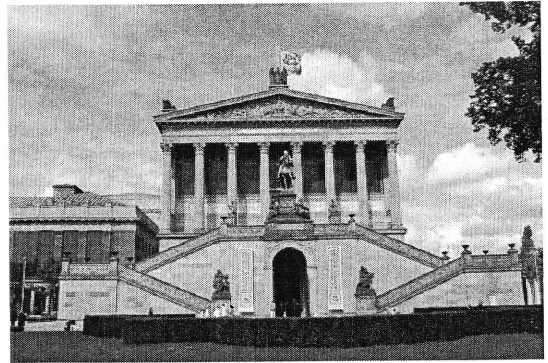
■伊藤とノイケルン Neukölln のトルコマーケットに行った。昼はケバブだった。店員に道を訪ねたが、英語が通じず、店員の友達も熱心に道を教えてくれたが、やはり英語はよく通じなかった。しかし彼らからの熱意は感じた。その後、ミッテ地区で二つの展覧会を見に行った。



一つはアンネ・フランクのもの（閉館の20分前のため無料で入ることができた）、もう一つはオットー・ヴァイト Otto Weidt のもの（無料）。ナチス時代のユダヤ人の生活を詳しく知ることができた。〔陳〕

■博物館島の旧ナショナルギャラリー Alte Nationalgalerie に行く途中、ベルリン・ドーム Berliner Dom 付近で物乞いの女性に声をかけられた。英語はわかるか、と聞かれ、わかると言う、紙片を渡され、「私はボスニアから来て、子どもを育てており、あなたの助けが必要」といった意味の文章が書かれていた。どう対応するのが適切なのか、わからなかったのも、ともかく1ユーロ渡すと、手を合わせて礼をされたが、何語かわからない言葉でさらに話しかけてくる。片言の英語のような言葉で「薬が必要なのでもっと欲しい」というようなことを言っているようで、キリが無いと思い「もう持っていない」と言って断ったところ、女性は再度礼をして去っていった。S バーン S-Bahn（都市内鉄道）の中で詩を朗読している人、子どもを抱いて路上にうずくまっている人など、ベルリンに来てから他にも様々なタイプの人を見かけた。

旧ナショナルギャラリーにはアドルフ・メンツェル Adolph Menzel 1815-1905 の「サンスーシ宮殿におけるフリードリヒ大王のフルート演奏会」などのドイツ・オーストリア・リアリズム、カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ Caspar David Friedrich 1774-1840 の「海辺の僧侶」などのロマン主義、フランス印象派などの作品などがある。ドイツの美術館・博物館では写真撮影が自由となっているところが多いのが印象的であった（フラッシュを使わないなど一定の制限はある。施設によっては撮影料が必要なところもある）。〔寺田〕



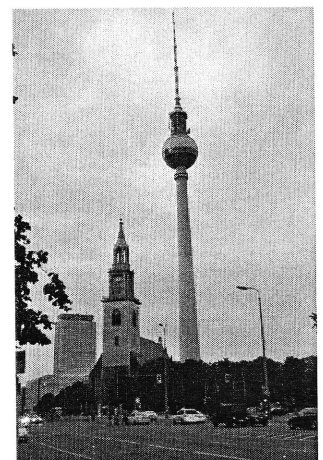
旧ナショナルギャラリー

### 8月31日（水）

自由行動日。この日、南田合流。

■博物館島にある新博物館 Neues Museum に行った。敷地が広く閉館までに全部見切ることができなかった。その後東ドイツ時代の1969年に建てられたベルリンタワー（ベルリンテレビ塔）に登った。入場のための検査が厳しく、空港のように水は持ち込み禁止、カバンもしっかりチェックされた。さらにチケットにあるバーコードを機械にかざし認証を受けてから、狭い旧式のエレベーターでタワーの上に行くことができた。〔陳〕

■新博物館に行った。第二次世界大戦中、爆撃で破壊され、ドイツ再統一後に再建事業が始まり、2009年になってようやく再開した博物館で、もとの建物の壁などが随所に再利用されている。わずかな欠片でも場所を特定して嵌め込んであるところが



ベルリンタワー

確認でき、特定できなかったものについては一種の戦争遺産として博物館内でまとめて展示している。〔寺田〕

### 9月1日(木)

■午前、ベルリン自由大学の国際研究所で中間報告会を開き、ドイツに来てから1週間強のあいだの体験や感想を出席者全員が口頭で発表し、情報・意見交換を行った。以下に主要な論点を二つ挙げる。

一つは文化事業のマーケティング手法の日独比較である。日本ではポスターやフライヤーを大量に制作し、挟み込み(折り込み)などの形で配布するが、ドイツでは年間スケジュールが載った冊子の配布を重視するため、公演単位では公演直前に街中にポスターを貼るほか、少量の小さなフライヤーを作るのみで、アマチュアの場合はそれを劇場の前などで配布する。この点については、公的助成の比重が高いベルリンと、企業メセナが強いハンブルクの比較も行った。

もう一つの論点は、ドイツにおける文化施設についてである。例えばタヘレス **Kunsthau Tacheles** (アーティストが不法占拠しアート・センター化した施設)は、かつては画期的な施設であり、周辺に多彩なギャラリーやアーティストが集まる呼び水としての機能を果たしたため、日本の地域文化を考察するうえでのヒントになる可能性がある一方で、今日、タヘレス自体から生まれる作品は質が低下しており、歴史的使命を終えたのではないか、という意見が出された。また、世界文化の家 **Haus der Kulturen der Welt** の例では、言語の問題が浮き彫りになった。世界文化の家では、対応する言語がほぼドイツ語のみとなっている。これは、英語をはじめとする特定の言語を特権化するのは避けたいが、あらゆる言語に対応するのは非現実的であり、結果として、所在地の言語であるドイツ語を採用したと考えられる。文化環境を整備するうえでの言語の問題については、翌日訪問するゲルリッツでも論点の一つとなる。〔寺田〕



国際研究所内のリビングキッチン



研究所内での集合写真

### 9月2日(金)

■朝、レギオナルエクスプレス **Regionalexpress** でベルリンを発ち、途中、ブランデンブルク州コト布斯 **Cottbus** で乗り換え、12時頃ザクセン州ゲルリッツ **Görlitz** に到着。車内でハンブルクで留学中の三宅と合流。

ゲルリッツはポーランド国境に接する（正確には市内を通過していたナイセ川が第二次世界大戦後ドイツとポーランドの国境となったため、ドイツ側ゲルリッツ、ポーランド側ズゴジェレツ Zgorzelec に分断された）ドイツ最東端の都市である。到着後、ツィッタウ・ゲルリッツ大学 Hochschule Zittau / Görlitz のキャンパスをはじめとする街の主要箇所を見学して回る。街全体で、ザクセン州による「王の道 via regia」展覧会が開催されており、統一されたロゴやポスターが様々な場所で見られた。「王の道」とは、中世において神聖ローマ帝国において保護されていた、ノヴゴロドからパリに至る中世の交通路を指す。交易都市として栄えたゲルリッツはその中継都市の一つでもあった。

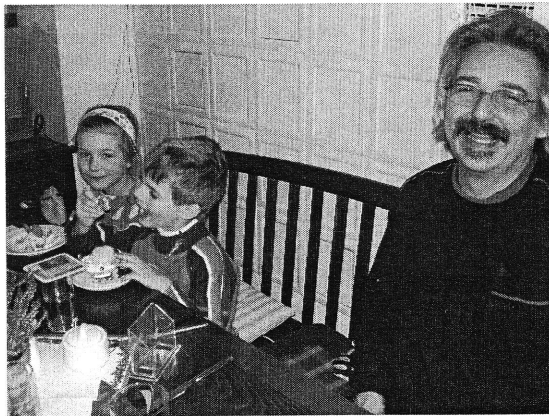
この日より、ツィッタウ・ゲルリッツ大学のマティアス・フォークト Matthias Vogt 教授（文化政策学・文化史）が運営する研究者のためのゲストハウスに宿泊する。〔寺田〕



ゲストハウス



ゲストハウス内の集会室（7日撮影）



フォークト教授（2008年撮影）

### ■9月3日（土）

前日に引き続き、ゲルリッツ市内の探索をした。市内には複数の博物館があるが、その一つ、シュレージエン博物館 Schlesisches Museum zu Görlitz を見学する。シュレージエン（現在のポーランド南西部、ドイツ東部、チェコ北東部を含む地域）の歴史を紹介する博物館であるが、外部からの観光客というよりは、地域の人々（ナチス・ドイツの敗北に伴いシュレージエン東部から西へ追放されたドイツ系住民、ズゴジェレツ側のポーランド系住民など）を主たる対象としているように見受けられ、個々の展示品の紹介はされているが、シュレージエンが地域としてどのような歴史を持っているのか、その中で個々の展示品がいかなる意味を持っているの

か、といったことは、外部の人間には分かりにくい。解説文の表記はドイツ語とポーランド語で、英語のオーディオガイドはあるが、職員の英語能力は必ずしも高くない（実際、オーディオガイドにトラブルがあったので、受付で尋ねたが、英語が通じず、解決しなかった）。〔寺田〕



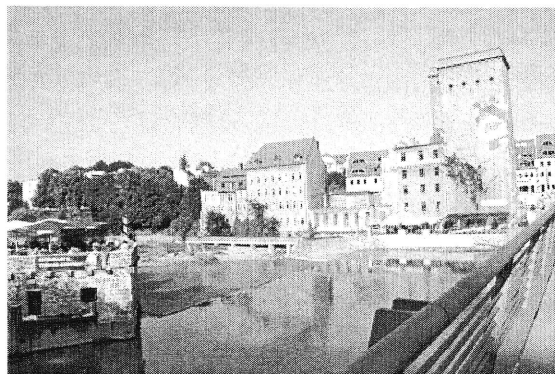
トラムの走るゲルリッツ市内



ゲルリッツ市内



ゲルリッツ劇場



ナイセ川、対岸がズゴジェレツ

## 9月4日（日）

■ゲルリッツからレギオナルエクスプレスに1時間程乗って人口約520,000人のザクセン州都ドレスデンを訪ねた。出発前、ゲルリッツ駅で警察からパスポートチェックを求められた。ポーランド国境に近いため、一見して外国人に見える人に対するチェックが厳しい。ただしポーランドは2007年にシェンゲン協定実施国となったため、ドイツとポーランドの国境でパスポートの提示を求められることはない。

ドレスデンではザクセン州立歌劇場

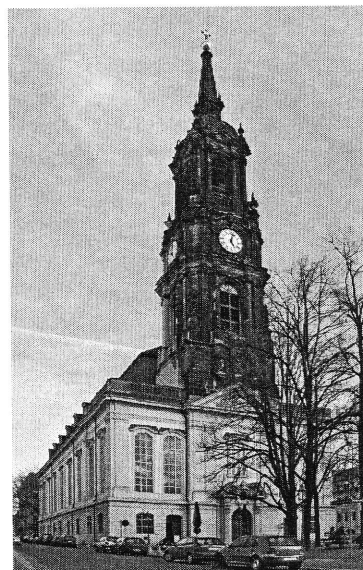


ゼンパーオーパー

Sächsischen Staatsoper Dresden（設計者の名を取ってゼンパーオーパーSemperoperと呼ばれることが多い）や市街を見学したあと、三王教会 Dreikönigskirche で開催されたザクセン声楽アンサンブル Sächsisches Vocalensemble の演奏会を聴いた。ザクセン声楽アンサンブルは、

1996年にドレスデン音楽大学出身者を中心に設立された室内合唱団で、ドレスデンを拠点に活動、多数のCDをリリースしている。神戸大異文化研究交流センターの招聘で2009年に初来日し、2011年にも11月から12月にかけて再来日、びわ湖ホール(滋賀県大津市)、月見の里学遊館(静岡県袋井市)、神戸文化ホール(兵庫県神戸市)、高槻現代劇場(大阪府高槻市)で公演を行った。今回、三王教会で演奏された曲目は、指揮者のマティアス・ユング Matthias Jungさんが自ら図書館で楽譜を発掘した1500年前後の曲を再演したもので、貴重な演目であった。

なお、三王教会は第二次世界大戦で破壊され、戦後に再建。そのため全体的に建物は新しいが、一部が破壊された祭壇は戦争遺産としてあえて完全に修復せず再利用している。建物のうち、礼拝に使われる部分は戦前の半分になっており、残りのスペースはフェアトレード活動など、様々な社会文化活動のために使われている。教会が地域課題やグローバルな問題に取り組み、文化と宗教と社会を結び付ける役割を果たしていることに感銘を受けた。〔寺田〕



三王教会 (Wikimedia Commons)

### 9月5日(月)

■小型バスを借り、ゲルリッツの東方にあるポーランドの街ヴロツワフ Wrocław を訪問した。人口約630,000人で、ポーランドでは有数の大都市である。市内を探索し、歌劇場、ヴロツワフ大学 Uniwersytet Wrocławski、大聖堂 Ostrów Tumski katedraなどを訪問した。ヴロツワフ大学は、1879年、作曲家ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms 1833-97に名誉博士号を授与し、その返礼としてブラームスから《大学祝典序曲》を贈られた大学として知られている。

ポーランドは2004年にEUに加盟しているが、まだユーロは導入していない。ドイツとの国境に近いため、インフォメーション・センターやごく一部の店舗ではユーロが通用するが、基本的には使えない。

ヴロツワフは2016年に欧州文化首都 Kulturhauptstadt Europas になることが決まっており、それに合わせて街中の施設や街路などで工事が行われている。観光客のために美しく整備された街並みのすぐ近くに社会主義時代の老朽化した均質なアパート群が立つ光景を見ることができ、2016年前後で街がどう変化するかが注目される。〔寺田〕



ヴロツワフの市庁舎

### 9月6日(火)

■昨日同様、小型バスでゲルリッツ南西、ポーランド・チェコの国境近くのツィッタウ Zittau を訪問した。ゲルリッツ郡の町の一つで、人口約28,000人。ツィッタウ・ゲルリッツ大学 Hochschule Zittau / Görlitzがある。

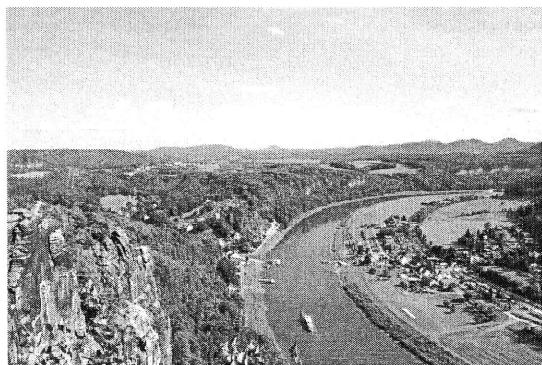
その後、チェコ共和国北西部リベレツ Liberec へ。ツィッタウの姉妹都市で、人口約 106,000 人。19 世紀から裕福な街であって、教会権力に対抗して市民が財力と権力の大きさを誇示するために 1892 年に建設した中世風の市庁舎が印象的である。当時は同様の中世風の建築物が流行しており、バイエルン州のノイシュヴァンシュタイン城 Schloss Neuschwanstein など、建造目的は異なるものの同時期（1869 年着工）の似たような趣味によるものである。

チェコも 2004 年に EU に加盟しているが、5 日のポーランド同様、ユーロが導入されておらず、こちらではインフォメーション・センターでもユーロを使うことはできなかった。

ゲルリッツに戻る前に、エルベ川沿いのバスタイ Bastei に立ち寄る。景勝地ザクセン・スイス国立公園の一部で、岩山が多く、フリードリヒ、カール・マリア・フォン・ヴェーバー Carl Maria von Weber (1786-1826)、リヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner (1813-83) らドイツ・ロマン主義の芸術家に多くのインスピレーションを与えた。付近には、1849 年にドレスデンで民衆蜂起が起きた際、ザクセン王家が避難したケーニヒシュタイン要塞 Festung Königstein がある。なおこの蜂起にはヴァーグナーも加わっていた。〔寺田〕



リベレツの市庁舎



エルベ川



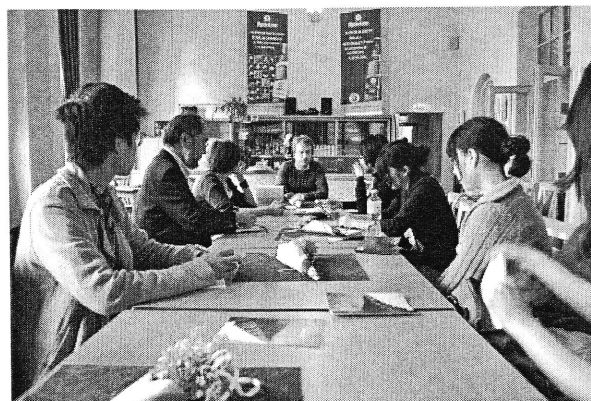
バスタイの岩山

## 9月7日(水)

■ゲルリッツ市内のシュレージエン博物館の学芸部長マルティナ・ピーチュ Dr. Martina Pietsch さんに開催中の特別展の解説をして頂く。特別展はゲルリッツ周辺の移民の歴史を扱うもので、移民自身によるインタビュー映像などを見ることができた。この地域の文化的多層性から、展示は全てドイツ語とポーランド語が併記してある。特別展を見たあとは、ピーチュさんに博物館の運営状況、展示のあり方、ポーランド側との関係などについて質問した。

その後、ゲルリッツ劇場 Theater Görlitz の総支配人代理フィリップ・ボーマン Philipp Bormann さんに劇場の案内と、その構造や運営形態について説明して頂いた。ゲルリッツ劇場は 1851 年オープン、1927 年に現在の姿になり、2000 年に一旦閉鎖して改装、2002 年に再オープンした。2011 年のシーズンからツィッタウにある劇場とともにゲルハルト・ハウプトマン劇場 Gerhart Hauptmann-Theater Görlitz-Zittau を構成しており、ゲルリッツだけでなく、

周辺の町やザクセン州からの予算（年間12億円程度）で運営している。一年間に新作を制作・上演するのは、オペラ・音楽劇が5つ、ダンスが4つ、演劇が11（ツィッタウ）、演奏会が7つ。それに加えて、旧作を250回程度上演している。年間来場者は約150,000人。特にポーランド、チェコ側としばしば協同事業を展開することがあるのが特徴である。観客空間は500席あり、自前のアンサンブルも持っているため、ゲルリッツの都市規模に対しては大き過ぎるとポーマン氏は指摘する。周囲の町へのアウトリーチ活動や、ドイツ人のみならずポーランド人の来場者も増やすことが課題という。



ゲルリッツ劇場にて。中央奥がポーマンさん

劇場内の工夫としては、階段の踊り場に事務方の職員の顔写真が展示されており、舞台の裏で誰が働いているかわかるようになっているのがユニークであった。こうした工夫は、来場者が劇場に対して親近感や信頼感を抱くことに貢献しているものと思われる。日本の劇場では、著名な館長や芸術監督などであればともかく、こうしたことをしているところはあまり無いだろう。〔寺田〕

劇場内の工夫としては、階段の踊り場に事務方の職員の顔写真が展示されており、舞台の裏で誰が働いているかわかるようになっているのがユニークであった。こうした工夫は、来場者が劇場に対して親近感や信頼感を抱くことに貢献しているものと思われる。日本の劇場では、著名な館長や芸術監督などであればともかく、こうしたことをしているところはあまり無いだろう。〔寺田〕

#### 9月8日（木）

■ゲルリッツを発ち、再びドレスデンへ。ドレスデン “カール・マリア・フォン・ウェーバー”音楽大学 Hochschule für Musik Carl Maria von Weber Dresden を訪問。マティアス・ヘルマン Matthias Herrmann 教授（音楽史）に学内を案内して頂く。ヘルマン教授はオペラ映画『魔弾の射手 Der Freischütz / Hunter's Bride』（ドイツ公開 2011年、日本公開 2012年）の考証を担当されており、ドレスデンで活動した作曲家ヴェーバーについて解説をして頂き、その後、市内にあるヴェーバーの墓なども見学した。



ドレスデン音楽大学にて。右端がヘルマン教授

ここで南田、陳、寺田、三宅はライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会を聴くため、ライブツィヒへ（9日午後ベルリンへ戻った）。その他のメンバーはドレスデンから直接ベルリンへ戻った。〔寺田〕

#### 9月9日（金）

■カイザー・ヴィルヘルム記念教会 Kaiser-Wilhelm-Gedächtniskirche において、ベルリン在住の音楽家による、東日本大震災で被災した仙台フィルハーモニー管弦楽団のためのチャリティコンサートが開催された。会場で募った寄附金および後日発売されたCDの売り上げが仙台フィルに贈られる。出演者およびプログラムは下記の通り。〔寺田〕

- 指揮： 沼尻竜典（びわ湖ホール芸術監督、日本センチュリー交響楽団首席客演指揮者）
- ヴァイオリン： 樫本大進（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団第1コンサートマスター）  
 町田琴和（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）  
 伊藤マレーネ（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）  
 日下紗矢子（ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団 Konzerthausorchester Berlin  
 第1コンサートマスター）  
 米沢美佳（コーミッシェ・オーパー・ベルリン管弦楽団 Orchester der Komischen  
 Oper Berlin）  
 番場美佳（ベルリン・ドイツ交響楽団 Deutsches Symphonie-Orchester Berlin）  
 矢袋美沙（ベルリン放送交響楽団 Rundfunk-Sinfonieorchester Berlin）  
 木戸恵子（ドイツ・オペラ管弦楽団 Orchester der Deutschen Oper Berlin）  
 星秀圃  
 眞峯紀一郎
- ヴィオラ： 清水直子（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）  
 小林雅恵（コーミッシェ・オーパー・ベルリン管弦楽団）  
 今津文恵  
 クリストあづさ
- チェロ： クライフ・カナリウス（コーミッシェ・オーパー・ベルリン管弦楽団）  
 峰本更（ベルリン・ドイツ交響楽団）
- コントラバス： 青江宏明（コーミッシェ・オーパー・ベルリン管弦楽団）
- フルート： ロベルト・レルヒ（ドイツ・オペラ管弦楽団）  
 フックスー今永靖子
- オーボエ： 真坂亮一（コーミッシェ・オーパー・ベルリン管弦楽団）
- クラリネット： リヒャルト・オーバーマイヤー（ベルリン・ドイツ交響楽団）
- トランペット： 四本喜一
- 演奏曲目： エルガー 《弦楽セレナード ホ短調》  
 モーツァルト 《オーボエ四重奏曲 ヘ長調》  
 番場俊之 《2つのヴァイオリンのための「時の香り」(1986/1990)》  
 ドヴォルザーク 《2つのヴァイオリンとヴィオラのためのテルツェット ハ長調》  
 アイヴズ 《答えの無い質問》  
 J.S.バッハ 《2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調》  
 クプコヴィッチ Ladislav Kupkovic 《2011年3月11日の犠牲者のために》



終演後。中央が沼尻さん



## 9月10日(土)

自由行動日。

■藤野教授、南田、陳、三宅とドイツ・オペラ・ベルリン Deutsche Oper Berlin のワーグナー《ニーベルングの指環(以下、リング)》の序幕《ラインの黄金 Das Rheingold》を観た。指揮はドナルド・ラニクルズ Donald Runnicles、演出は1984年にドイツ・オペラで初演されたゲッツ・フリードリヒ Götz Friedrich 1930-2000 (コーミッシェ・オーパー・ベルリン Komische Oper Berlin を立ち上げたヴァルター・フェルゼンシュタイン



ドイツ・オペラ

Walter Felsenstein 1901-75 の弟子) によるもので、舞台上に客席側から奥へ向かって伸びる長大かつ巨大なトンネルが置かれ、基本的にその中でストーリーが進行して行くことから「トンネル・リング」と呼ばれることがある。地下鉄の工事現場をイメージした舞台(ロンドンの工事現場の印象に基づくという)とされる。この9月にこの演出の《リング》は2回チクルス(全4日×2回)で上演された。

公演は、ローゲ役のブルクハルト・ウルリヒ Burkhard Ulrich 以外はあまり声が出ておらず、良い舞台とは言えなかった。劇場のサイズが大き過ぎる(客席数 1,859)のも問題の一つかもしれない。

現在のドイツ・オペラの建物は1961年に建てられた。ベルリンの他の2つの歌劇場、コーミッシェ・オーパーとベルリン国立歌劇場 Staatsoper Unter den Linden が東ドイツ側にあつたため、唯一西側にあつたドイツ・オペラは西側民主主義・資本主義の象徴と見なされており、伝統的な馬蹄形ではなく、全ての客席で平等に舞台が見えやすい(とはいえ席により多少の差があるが)ように客席が配置されている。

なお、ドイツ・オペラは「クラシックカード」の対象劇場である。このカードは、30歳までを対象とし、年間15ユーロで作ることができる。利用可能な劇場やオーケストラ(ドイツ・オペラ、コーミッシェ・オーパー、ベルリン国立歌劇場、コンツェルトハウス Konzerthaus Berlin、ベルリン国立バレエ Staatsballett Berlin、ベルリン放送交響楽団ほか Rundfunk Orchester und Chöre GmbH Berlin)の演奏会では、当日券が出る場合、このカードを提示することでどの席種であってもオペラやバレエは10ユーロ、演奏会は8ユーロで聴くことができる。今回も、これを利用して本来100ユーロ以上する席を10ユーロで買うことができた。当日、開演1時間以上前から窓口に並んで買ったが、他にも多くの人が当日券を購入しており、座席はほぼ満席になっていた。このようなカードがどのような経緯で作られ、どのように運営されているのか詳しく調べることはできなかったが、複数の施設・団体間で若年層向けのチケット販売上の連携を行っている興味深い事例と言える。

この後数日かけ、第1・第2チクルスを組み合わせて《リング》全てを鑑賞することができた。《ラインの黄金》と《ジークフリート Siegfried》、《ヴァルキューレ Die Walküre》と《神々の黄昏 Götterdämmerung》がそれぞれ同じキャストだったらしく、概して後者のほうが舞台の完成度、歌手の技量は高かった。〔寺田〕

## 9月11日(日)

自由行動日。

■三宅、南田、喜多とフィルハーモニーに隣接する楽器博物館に行った。ここも博物館の年間パスの対象施設である。多くの近代の楽器があり、ホルンのようなベル付きのヴァイオリンなど、今日まで生き残れなかったユニークな発明品も多数展示されている。研究機能も持つ。

この日は日曜日のため、ほとんどの店が休みだった。唯一開いている店はサブウェイで、そこで昼の食事。何週間もケバブが続いて飽きてきていたかもしれない。ケバブと同じ具だがなぜかサブウェイのほうが美味しかった。〔陳〕

■ドイツ・オペラでヴァーグナー《ワルキューレ Die Walküre》を観る。〔三宅〕

■フィルハーモニーでピッツバーグ交響楽団を聴く。指揮マンフレート・ホーネック Manfred Honeck、独奏アンネ=ゾフィー・ムター Anne-Sophie Mutter。ヴァーグナー《ローエングリン第1幕前奏曲》、リーム Wolfgang Rihm《ヴァイオリンとオーケストラのための Gesungene Zeit》、マーラー《交響曲第5番 嬰ハ短調》。黒人のコントラバス奏者がいるのはアメリカのオーケストラらしい特徴であった。〔寺田〕

## 9月12日(月)

■ベルリン自由大学の国際研究所でスザンネ・クリーン Dr. Susanne Klien さん(文化人類学)にレクチャーをして頂き、続いてこれまでのドイツでの体験について意見交換を行った。

クリーンさんは京都大学で博士号を取得され、現在は東京都千代田区にあるドイツ日本研究所 German Institute for Japanese Studies Tokyo の専任研究員である。

クリーンさんのレクチャーは、ご自身のフィールドワークをもとに、文化人類学の視点から越後妻有(新潟県十日町市、津南町)と「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を見ていくものだった。「大地の芸術祭」開始の経緯やテーマ(まったく違う背景、年齢、職業を持つ人たちがアートをきっかけに接点を持ち、協同する)、ポスターに現われた県・市・町・ギャラリーのイメージ戦略の違い、地元住民との関係(「大地の芸術祭」開始によってアーティストと交流したことで農業を継続しようと決めた住民や、自宅で来訪者を受け入れ一緒に軽食をとりながら会話する「おにぎり車座」を実践する住民もいる一方で、「大地の芸術祭」の知名度が上がったために来訪者が多くなり、多様なコミュニケーションが生まれるかわりに農業の妨害にもなってしまうといった懸念がある)、参加アーティストの紹介、観光化・商品化に伴う問題など、多岐に亘って解説して頂いた。地方で行われる芸術祭は、来場者がいなければ成り立たないが、多過ぎると矛盾が生まれてしまう。芸術祭を開催するにあたっては、観光客数や観光化に対応する、地域の身の丈にあった



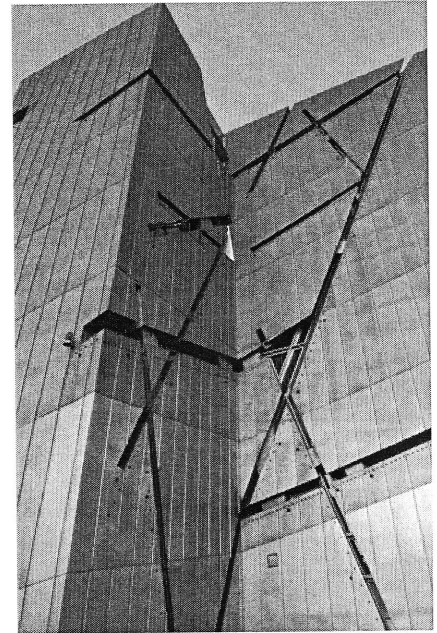
左から2番目がクリーンさん

ヴィジョンも必要となる。

後半はゲルリッツ滞在中の経験について情報共有と意見交換を行った。主にゲルリッツとズゴジェレツの格差と協同の取り組みや、交易拠点としてのゲルリッツの歴史を議題とした。〔寺田〕

■夕方、ダニエル・リベスキンド Daniel Libeskind が設計した、ユダヤ博物館に行った。壁面に意図的な亀裂が入れられていたり、床が歪んでいたりと、はるか上の小さな明り取り窓以外の窓が無い暗闇の部屋があったりと、建物自体がユダヤ人の歴史を暗示している。展示はユダヤ人の歴史を栄光（啓蒙主義時代のベルリンでは、ユダヤ人の知識人を友に持つことがドイツ人の誇りだった時期がある）と差別の両面から解説するもの。

しかし、建築や展示内容以上に印象的だったのは、周囲を警官が警備し、入口には空港にあるような X 線による手荷物検査やボディチェックが行われていたことである。以前、新シナゴークにも行ったが、そこも周囲を警官が警備しており、中には入らなかったがやはりセキュリティチェックがあるようだった。キリスト教会ではこのようなことは無い。ベルリン市内にはあらゆる場所に「加害者」であるドイツ人にユダヤ人虐殺の歴史を忘れないようにさせる「警告碑」があるが、それらに加えて、こうしたユダヤ人関連施設の警備の嚴重さは、現代にまで続くユダヤ人問題の根深さを痛感させられた。〔寺田〕



壁に亀裂が入れられたユダヤ博物館

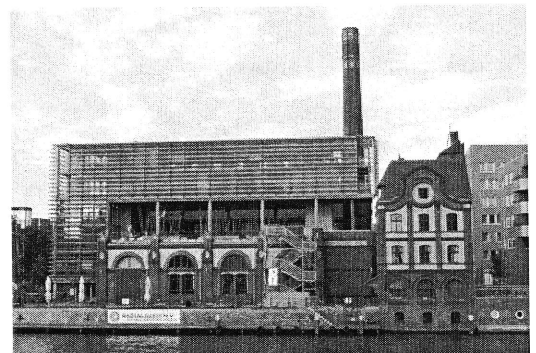
### 9月13日(火)

■アート・センター、ラディアルシステム V Radialsystem V をアート・マネージャーのトーマス・ユング Thomas Jung さんの案内で見学した。多領域のアートの結び付きを図り、例えばクラシック音楽のような伝統的芸術の新しい提示の仕方を探るのが目的の施設である（8月27日に鑑賞したサシャ・ヴァルツのオペラもその一つ）。

建物のうち旧館部分は 1920 年代初頭に建設され、1998 年まで水道局所有の現役の排水処理場だった。2006 年に新館が完成し、オープン。

かつてのボイラー室を改装した多目的ホール（舞台芸術の公演・練習、講演会、パーティ、結婚式など）、機械室を改装したメインホール、ダンススタジオが入る新館などから成る。

常勤職員は 23 名で、実施するプロジェクトに応じて増員することがある。貸館収入、宝くじの基金（主にテクニカル経費）、レストラン収入、僅かなチケット収入などを組み合わせて経



ラディアルシステム V

営している。恒常的な公的助成は出ておらず、出るとしても特定のプロジェクトに対してのみとのことであった。潤沢な予算があるわけではなく、企画したプロジェクトの半数以上が実現しないという。

この施設はサシャ・ヴァルツのカンパニー **Sasha Waltz & Guests** やベルリン古楽アカデミーが拠点として使用しているが、前述の通り貸館も行っている。貸館のある多目的施設は日本では一般的だが、オペラ専用、バレエ専用など劇場の用途が定められ、さらに専属のオーケストラや合唱団などがあることが一般的なドイツではラディアルシステムは珍しい施設である。

その後、能楽師 (noh performer)、青木涼子さんとフルート奏者クラウス・シェップ **Klaus Schöpp** さんの公演を観た。武満徹 1930-96、細川俊夫、日野原秀彦 (イタリア在住、7月に神戸大アートマネジメント研究会が開催した未就学児のための「神戸大コミュニティーコンサート vol.17」でお世話になった) 作品による謡とフルートのコラボレーションであって、しかも伝統的な謡やフルート奏法ではなく、非常に現代的かつ特殊な演奏法を用いた表現によるものであった。

青木さんのご両親もおられ父親の建築家、青木茂さん (首都大学東京研究戦略センター教授) と知り合った。古くなった建物の構造に手を入れて再生することで新築に比べ環境負荷を低減する「リファイン」手法の主唱者で、後日、神戸芸術工科大学で講演をされ、再会する機会があった。〔寺田〕

## 9月14日 (水)

■市内のカフェで、ベルリンにいられていたヒルデスハイム大学 **Universität Hildesheim** のヴォルフガング・シュナイダー **Prof. Dr. Wolfgang Schneider** 教授 (文化政策学) にドイツの文化政策の仕組みについてレクチャーをして頂いた。アンネグレート・ベルクマン **Annegret Bergmann** さん (文化政策学、主に日本の文化政策の研究者で、20年の滞日経験が



右端がユングさん



青木さん (左) とシェップさん



左から3人目が日野原さん、その右隣がサシャ・ヴァルツ、一番右が青木茂さん



シュナイダー教授

ある)、秋野有紀さん(文化政策学、日本学術振興会特別研究員)も同席された。

ドイツには 80 の歌劇場、120 の演劇劇場があり、大規模な公金が投入されている(ベルリンの3つの歌劇場だけで約150億円)。ドイツの文化予算の90%は都市部の施設(インスティテューション)で使われており、都市とそれ以外の地域の格差が大きいことや、財政的危機のときにどう財源を確保するか、さらにはできるだけ不平等を無くし、かつ少ない予算でより多くの人の利益になるよう文化活動を展開するにはどうすれば良いか、といった課題に対応する、文化マネジメントの必要性について伺った。1979年にはスローガン「全ての人に文化を」が唱えられており、特に教育(「文化的教育 kulturelle Bildung」)との関係が近年の文化政策における重要なテーマとなっている。

また、近年、日本各地でアートフェスティバルが開催されていることを踏まえ、ベルリンのような大都市でのフェスティバルについて、フェスティバルのコンセプトの問題や、フェスティバルと日常的公演の関係などの観点から議論した。〔寺田〕

### 9月15日(木)

■ベルリン自由大学そば、ダーレム Dahlem にあるベルリン国立東洋美術館 Museum für Ostasiatische Kunst (以下、東洋美術館)を訪問し、日本美術部門学芸部長アレクサンダー・ホフマン Dr. Alexander Hofmann さんに非常に流暢な日本語で館内の解説をして頂いた。

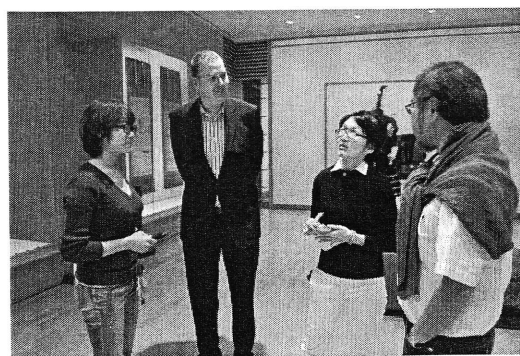
東洋美術館の東洋部は1906年に設立され、当時のドイツの帝国主義的野心を背景に、東アジアの作品収集を行った。日本でも2年に亘る調達活動が行われており、1945年までに6,000点に達したという(その大部分は第二次世界大戦後ソ連によって接收され、未だロシアから返還されていない)。中央・東南アジア部は2006年まで独立した美術館であり、インドを中心とするコレクションを持つ。予算はベルリン州よりも連邦から出るほうが多いが、潤沢ではなく、1991年以降、新規購入のための予算はほとんど無いという。

ホフマンさんとは大きく2つのことについて議論した。一つは「芸術」概念を巡る問題

である。「芸術」という考え方がヨーロッパに由来することは明らかであり、同じ視点や尺度でアジアやアフリカについて考えることができるのか、という問題はしばしば提起されるが、実際に品物を持ち、何らかの形で展示することが求められる美術館の現場では深刻なジレンマを生んでいる。東洋美術館の場合、基本的に伝統的美術観に立ち、文化人類学的、文化史的意義のある品物であっても、「美術品」として展示しているため、その品物の機能(料理に使うなど)についての解説は最低限でしかない。展示順も作製年代順ではなく、特定のジャンルご



東洋美術館



左から2番目がホフマンさん

と（「中国近現代絵画」「家具」、マルティン・グロピウス・パウで開催中の北斎展に合わせた北斎をモチーフとした現代作家の作品など）になっている。ホフマンさんとしては、アジア史に精通しているドイツ人は多いわけではないのだから、時代順に展示して、人々の生活の歴史の総体を展示、解説したほうが良いのではないかと（文化人類学的立場）とも考えているという。

もう一つは、美術館と地域の関係を巡る問題である。東洋美術館は 2019 年頃にベルリン中央部に移転することが決まっている。博物館島付近にあることで、観光客の呼び込みによる来場者数の増加が見込めるためである。ただ、異論もある。地方主権のドイツとはいえ、ベルリン一極集中の傾向があり、さらにベルリン市内でも様々な文化施設がミッテ地区に集中している。東洋美術館はベルリン市内でも比較的郊外に近い位置にあり、確かに現状では来場者数は必ずしも多くないが、ミッテ地区とは異なる文化的発展を望むことができる。また、東洋美術館周辺の住民が熱心なリピーターになっている

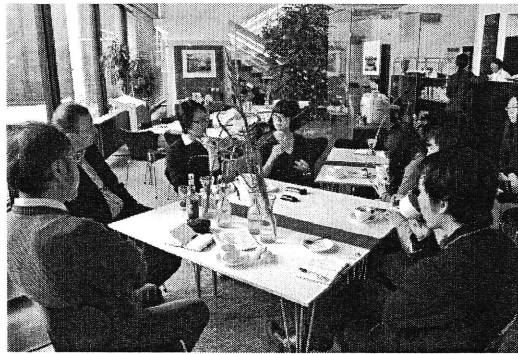
し、ベルリン自由大学はアジア研究に力を入れていることから、ダーレムとの関係も良好である、など。こうした問題について、館内を回ったあと、ホフマンさんと議論した。

夜は、アンネグレート・ベルクマンさんのご自宅でドイツの家庭料理を頂いた。レストランなどで出されるドイツ料理はあまり美味しくないという意見（ベルリンにはアジアや南欧など様々な地域の料理店が集まっているので、そちらのほうが美味しい）があるが、家庭料理はそうではなく、野菜をたっぷり使った料理で非常に美味しかった。〔寺田〕

## 9月16日（金）

■クルメ・ランケ Krumme Lanke にある国際現代アートギャラリー、ハウス・アム・ヴァルトゼーhaus am waldsee を訪問し、アート・ディレクターのカーチャ・ブロムベルク Dr. Katja Blomberg さんに施設や展示中の作品について解説して頂いた。30-40 代の国際的アーティストで、ベルリン在住の人を採り上げており、特に境界横断的なアートの紹介に集中的に取り組んでいる。施設としては作品の販売は行っていない（購入希望者は、展示に関わっているギャラリーを通してであれば購入可能）。そのかわりアーティストと来場者が交流できる機会が頻繁に用意されている。ラディアルシステム同様、宝くじの基金や様々な補助金を組み合わせて運営されている。〔寺田〕

■IAC Berlin Gallery で開催中の台湾の公的助成による現代アート展、「液態殻子 LIQUIDSHELL・sound & video installation by Wang ChunChi」に行った。台湾人、日本人のアーティストによるいくつかの作品。アーティスト（台湾人）に私の台湾語が下手だと言わ

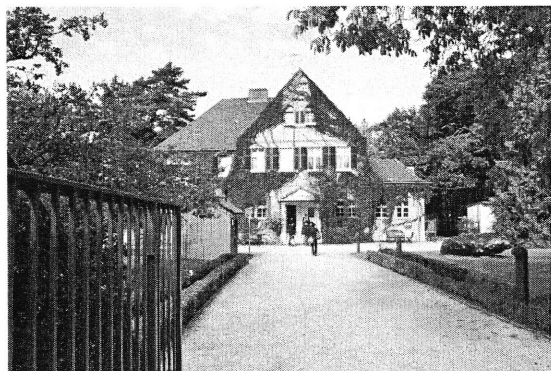


美術館のカフェで議論する様子



夕食。画面左がベルクマン夫妻

れた。身振りも日本人っぽい、同化してしまったかもと言われた。帰り道にカスペル Kasperl というドイツの人形劇場を発見したが残念ながら開いていなかった。最後はベルリンの壁記録センターに寄った。昼はベルリン在住二十数年の台湾人夫婦が経営する台湾料理店に行った。久しぶりの台湾の味、懐かしかった。数日後また他の人たちと一緒に訪ねた。皆初めての台湾料理をベルリンで経験した。〔陳〕



ハウス・アム・ヴァルトゼー



中央がブロムベルクさん

### 9月17日(土)

自由行動日。

■ハンブルクで開催された Elbphilharmonie Open Air を観るため、一度ハンブルクへ行き、夜、ベルリンに戻った。〔三宅〕

■今日は、昨日かなり早く寝た(23:30?)ので、7時に起床。9時頃に家を出て、パン屋に日々の記録を書きに行く。10:30にリュデスハイマー・プラッツ駅に集合だった。10時過ぎにパン屋を出て、郵便局で日本への荷物の宅配サービスについて聞く。英語ができる人が一人いた。10キロまでは55ユーロ、3週間ほどで届くらしい。思っていたよりも早かった。ただ、本ばかり送ると10キロで済むかどうか? 服など、かさばるけれども軽いものを入れたほうが良いかもしれない。

郵便局から家に一旦パソコンを置きに帰るところでみんなに会った。先生が、村田さんと連絡がとれたので、少し早めて10:15に集合にするという連絡がきたそうである。急いで鍵をもらって家に入り、パソコンを置いて、風邪気味の寺田さんを残して出る。

土日は元より10分に1本くらいになる電車だが、今日はもっとひどかった。地下鉄で動物園駅 Zoologischer Garten まで行き、Sバーンに乗り換えて東に向かおうとしたが、ヴェルビュー Bellvue 止まりだった。先生によると、土日は短距離間のピストン輸送になることがよくあるらしい。Bellvue で10分か15分待つと、やっとフリードリヒ通り Friedrich Str. 行きがやってきた。つめつめだ。Friedrich Str. からまた乗り換えて一駅、やっとハッケシャーマーケット Hackescher Markt に着く。驚いたことに、昨日1人では尻込みして入れなかった、少し危なそうでおしゃれなヘーフェ(中庭を持った複合施設)に、Gallery Murata & Friends はあった。オットー・ヴァイトのことで有名なヘーフェらしい。彼はユダヤ人を自分のところで働かせながら、ナチの手からかくまっていた。アンネ・フランクの記念館のようなところもここにある(実際にアンネが暮らしていた場所というわけではない)。その奥、グラフィティだらけの階段を2階に上がるとギャラリーがある。人一人やっと入れるくらいの入口から入ると、村田さ

んが迎えてくれた。ドイツ人と日本人のハーフらしい。若く見えるが、もう 10 年そこを経営しているという。

初めの 2000 年頃はプロジェクトのような感じで、ぼろぼろだった物件を建築学生としてどうしていくかというところから始まった。建築事務所で働いていたが、辞めてこちらに専念するようになったそうだ。ボスには勿論反対されたらしい。今は商業ギャラリーだが、現在進行中のプロジェクトはないらしい。他のスタッフと一緒にブレインストーミング中だと言っていた。だから今は助成も貰っていないし、展示もしていない。壁に 3 月 11 日の地震に関連するキャプションが少しあり、きちんと読めなかったが気になる。

建物の入ってすぐ右の部屋は、昔ユダヤ人をかくまっていた部屋らしい。普段は大きな本棚で入口がかくしてあり、ばれないようにしていた。しかし結局はスパイが告発して、このユダヤ人は出て行かねばならなくなっただけらしい。その人がどうなったかは今日聞いていない。

今、ギャラリーの仕事だけで生活できているスタッフが村田さんだけだそうだ。他にドイツ人とイタリア人、日本人などのインターンが居た事があるらしいが、とにかく今 2 人？ほどのインターンは（当然だが）手伝いという形で無償で働いている。その他に他の仕事を持ってパートタイムで働いている人が 1 人いて、全部で 5 人くらいで運営していると聞いた。初めは、半分日本人である村田さんがベルリンに日本のような場所をつくる、あるいは自分探しとして始めた。茶室を一つ作ろうと考えていたが、やっているうちにきちんと商業ギャラリーとしてやったほうが良いという方向になり、後回しにすることにしたい。しかし彼の話し振りだと、茶室は諦めていないと思う。入口から左に二部屋目は事務所として使っている。簡単なシャワーや流しもある。初期は入って右のユダヤ人をかくまっていた部屋にアーティストがレジデンスしていたのだと言う。左の奥にも階段があり、そこには普通の大きさのドアがあった。ユダヤ人をかくまっていた時は、こちらが正式な入口だったのだろうか。

プロジェクト初期は、天井も床もフレキシブルに付けたり外したりできる構造に改装していたが、ある時期から助成をもらって、きちんとしなければいけなくなり、それで床と天井を塞いだそうだ。この場所は、この建物の歴史的な重要性が認められて、オークションにかけられたところを、元々この建物の管理をしていた会社が（オーナーは別だった）文化的関心を寄せる多方面から資金を集めて買った。これは珍しいケースだと村田さんは言う。そして今は周りの建物の部屋に比べて安価に借りられているらしい。このビルには他にアート系雑貨屋や、エレクトロのかかる怪しいカフェなどへんでこで面白いテナントが沢山入っていた。

そのヘーフエを出て、伊藤さんと隣の華やかなヘックマン・ヘーフエのイタリアンで昼食。私はショウガと人参のスープを頼んだ。久しぶりにとても健康的な、日本食のような外食をした。14:30 前にアレクサンダープラッツ駅で彼女と別れて、私は S バーンでフリードリヒ通り駅まで行き、U6 に乗り換えてテーゲル湖を目指す。ほんの 20 分ほどで行ける。終点のアルトテーゲル駅まで乗り、降りて人の歩いて行く方向に付いて歩いて行く。途中で 1 クーゲル 0.8 ユーロのアイス、マシュマロ味を食べながら、10 分で湖だ。人々が湖周辺のベンチで憩って話をしていて。1 人は圧倒的に少なく、ほとんど家族連れかカップルだ。中高年カップルは特に多かった。彼らは手を組んだり繋いだりして、日本もそうならいいのにと考えた。パンを貰い過ぎて肥えた白鳥が沢山いた。ポツダム行き、ベルリン市内行き？の船の乗り場があった。乗り場がなければ湖を一望できていいのに、3 つある乗り場が景観を壊している。トルコ系の人も沢山岸辺にきていた。沖のほうには個人のヨットのような船がたくさん浮かんでいた。町から近いので、自然以外何もない絶景！ということはないが、町中に疲れたらこういうとこ



ろでのんびりするのはいらうなと感じた。

U6 でテンペルホーフ Tempelhof まで一気に帰り、S バーンと U3 を乗り継いで 20 時頃帰って来た。〔橋本〕

## 9月18日(日)

自由行動日。

■コーミッシェ・オーパーのファミリー・デイに行った。主に7歳くらいまでの子どもを対象としたイベントで、劇場の表側だけでなく、裏側（リハーサル室や大道具室など）も開き、それぞれの部屋でオペラに親しんでもらうための取り組みが行われている。入場は無料で、一部有料のところもあった。一日中、各部屋で継続しているため、全てを見ることはできなかったが、リハーサル室で行われたプーランク《象のババール》の演奏（朗読者と2管編成、ハーブやコントラファゴットも入る本格的な編成であった）、舞台衣装のようなコスチュームやフェイスペイントを子どもに施すブース、クローク部分に設けられた軽食スペースなどを見ることができた。もちろん、舞台上でも様々な公演が行われていた。

なおコーミッシェ・オーパーの特色として、各座席に設置された多言語字幕の表示装置でトルコ語を選択することができる。ただ、トルコ系住民の来場者はあまりいないし、そもそもオペラを観に来るようなトルコ系住民はドイツ語を解する可能性が高いので、あまり意味が無いという意見がある。他方、ドイツ語を解する世代（2世、3世など）が、解さない世代（1世など）を劇場につれてくることによって、下から上へ効果が浸透することもあり得るのではないかと、という意見もある（継続して調査が必要）。〔寺田〕

■今日は7:15に起床。南田さんが風邪の疑い。8:20にリュエスハイマー・プラッツ駅に到着。休日なのであまり本数がないが、U3とU9を乗り継いで動物園駅まで出た。運良くそんなに待つことはなく、100番のバスも全力で走ったら待っていてくれた。ベルリンのバスは、走ってくるのが見えると待ってくれる気がする。そして運転手の切符の確認は、見ないようにしているのか？というくらい見ていない。あるかないかくらいは見ているのだろうか？それも有効な切符かわからないのに。

州立劇場前 Staatsoper Berlin で下車。道路を渡ってフンボルト大学の横を通り抜けて、博物館島方向へ。ペルガモン美術館の前あたりに出る。9:25にボーデ美術館前に着いたが、すでに沢山並んでいて、その列は美術館前の橋のところをとっくに通り越して、川沿い100メートルくらいの長さに及んでいた。横ではマーケットをやっているが、ひどい天気で常に雨が降っており、たまにざっと降る波がやってくる。並んでいる人はもれなくびしょ濡れだった。私もスニーカーの中までぐしょぐしょになった。

10:40にやっと特別展のチケットが買えた。チケットの番号は383番だった。その日売れたチケットの通し番号だ。チケットに載っている番号宛に携帯メールを送ると、順番が来たらメールがくる仕組みになっている。私は利用しなかったが、番号の表示される電光掲示板といい、なかなかハイテクだった。オーディオガイドもiPodを利用しており、画像も音もきれいだった。

展覧会“Gesichter der Renaissance – Meisterwerke Italienischer Portrait-Kunst”（英語では“Renaissance Faces”、2011年8月25日から11月20日までボーデ美術館で開催）は、ルネッサンス期の肖像画を集めた展覧会である。ジャンルとしての肖像画は15世紀に発生したらしい。展覧会はベルリン連邦美術館群とアメリカ・ニューヨークのメトロポリタン美術館に

よってオーガナイズされている。フィレンツェのウフィツィ美術館やルーヴル美術館、ロンドンのナショナルポートレートギャラリーが蒼々たるコレクションを携えて参加しているとのことだ。ドイツ連邦政府外務省とイタリア外務省のお陰で本展が成り立っていると書き添えられている（以上展覧会パンフレットより）。

主にフィレンツェとヴェニスが肖像画の二大中心地として栄えたということだった。そして画風が異なるので、展示は地理的にしてあるとキャプションに書かれていた。最後のほうにドイツなど北方のルネサンス絵画や彫刻も少しだけ展示してあった。でも分量としてはイタリアのものより遥かに少なく、おまけのようなものだった。さしずめ、ドイツ人の自尊心に報いた程度というところだろうか？

展覧会は総じて割と満足できるものだった。キャプションやオーディオガイドがよく方向付けされていて、ある程度説得力をもたせることが可能になっている。ガイドの分量は多く、30作品ほどに対して解説があったように思う。その幾つかは事件やエピソードなどに分け入って詳しく構成されていた。へとへとに疲れる一歩前の展示分量もありがたい。じっくり見てちょうど二時間だった。解説が部分的に聞ける iPhone アプリケーションもある。無料でダウンロードできたが、これはドイツ語版しかないようだ。

展示室は黒を基調とし、絵画の劣化回避もあるのだろう、照明は暗めで、センセーショナルとまではいわないが、少しものものしい印象だった。ボーデはいつもそうなのだろうか、これが企画展だからだろうか。ホワイトキューブではない展示風景だと、なぜその背景にしたのかいつも勘ぐってしまう。

ボーデ美術館を出たのはもう 14:10 頃だった。Eberswalder に向かう。壁公園の蚤の市だ。小雨が降っていた。前回気になったトルコ系の総菜店で 5.9 ユーロの弁当型のご飯を注文する。ピーマンのご飯詰め、ピラフのようなもの、野菜の煮込みにサラダ、パンという盛りだくさんなランチだ。多かったのにペロっと食べてしまった。ベルリン在住のおじさま 2 人が話しかけてくれた。片方はグラフィックデザイナーだと言っていた。自称なのか、どうなのか？その後、先週靴を買った中古靴屋さんで、ブーツをまた 39 ユーロから 35 ユーロに負けてもらって買った。おじさんは私のことを覚えていたが、彼のほうが押しが弱い。蚤の市を出て、帰路につく。

Uバーンの車内で前に座っていた家族が不思議だった。ドイツ人と思われる白人のカップル。でも子どもが黒い肌にくりくりの天然パーマで、見るからにアフリカ系の男の子である。3 歳くらいだと思う。女性は若く、20 代半ばか後半だ。男性のほうは 30 を超えていそう。女性と男の子よりも、男性と男の子のほうが親密に思われたので、養子なのか、あるいは男性の前妻の子どもなのだろうか？それにしてもアフリカ系には変わらないが、日本では人種の違う養子というケースはなかなか見られないだろう。明らかに血がつながっていない、というのが他人からもわかってしまうことは、社会で生きていくにあたってやりやすいことではないかもしれない。色んなことが、これからの彼にはきっとあるのだろう。良い悪いの話ではないのだが、日本では稀な状況だけに、色々と考えてしまった。

ノレンドルフプラッツ Nollendorfplatz で U3 に乗り換えると、家路という感じでほっとする。リュエデスハイマーで降りて、鍵を持っていないのでいちかばちか家に帰ってみる。陳さんが居てくれたので閉め出されずにすんだ。なすとタマネギの味噌汁、なすの甘辛煮、かぼちゃの醤油煮、かぼちゃの塩煮を作った。甘辛煮はなかなかよくできた。〔橋本〕

## 9月19日(月)

■ベルリン自由大学の国際研究所で「日本食の日」を開いた。研究所のフェローの方々をお招きし、橋本、陳、伊藤、三宅らを中心にちらし寿司、肉じゃが、日本酒などの日本食を用意して振舞うとともに、山田耕筰や久石譲の作品の演奏（ギター／喜多、フルート／寺田）、台湾の人形劇の紹介（陳）などを行い、日本文化の歴史や台湾文化との関係などについて、議論した。イスラエル、インド、香港など、それぞれのフェローが非常に異なる文化的背景を持っているため、様々な角度から刺激的な指摘がなされた。〔寺田〕



「日本食の日」



台湾人形劇について議論

## 9月20日(火)

■コンツェルトハウス小ホール Kleiner Saal でドイツ・ツアー中の神戸市室内合奏団の演奏会が開催され、午前中よりその手伝いをした。開催までにトラブルが無かったわけではないが、結果として2階席を含めほぼ満席となる盛況であった。出演者およびプログラムは下記の通り。〔寺田〕

指揮：ペーター・ヘル Peter Hörr

ヴァイオリン：日下紗矢子

ソプラノ：タティアナ・ティムチェンコ

Tatjana Timchenko

演奏曲目：ヤルナツハ P. Jarnach 《弦楽合奏のための孤独な者たちへの追憶》

モーツァルト 《ヴァイオリン協奏曲第3番 ト長調》

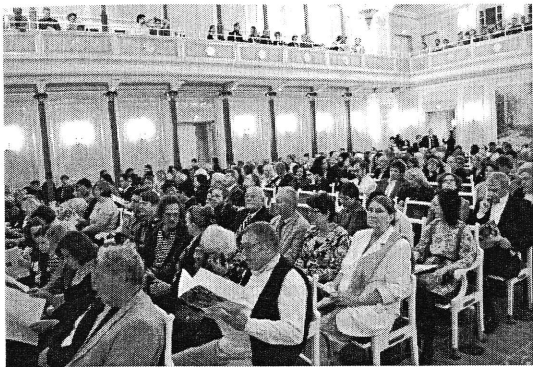
モーツァルト 《ソプラノ・コンサート・アリア「ああ、私は前からそのことを知っていたの！」「私の目の前から消え去っておくれ」》

武満徹 《弦楽のためのレクイエム》

ハイドン 《交響曲第64番 イ長調》



コンツェルトハウス



客席



モーツァルト・ヴァイオリン協奏曲

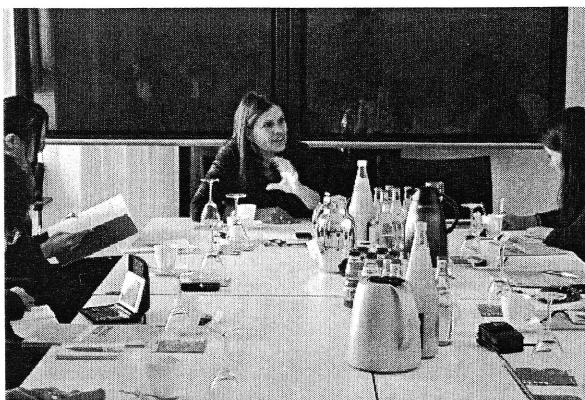
### 9月21日(水)

■ゲーテ・インスティトゥート Goethe Institut (以下、ゲーテ) を訪問し、広報担当のクリスティーネ・レグス Dr. Christine Regus さん (インターカルチュラル・シアター研究) にお話しを伺った。

ゲーテは 1951 年に連邦外務省が設立し、本部はバイエルン州都ミュンヘンにあって、日本 (東京、京都、大阪) を含め多くの国々に事務所を持つ。当初は外国人のためのドイツ語教育のほかに、ナチスのためにドイツ文化に対して世界が抱くようになったネガティブなイメージを払拭するのが目的の組織であったが、1960 年代より左翼系知識人や学生がナチス時代に関する様々なタブーを破り、よりリベラルかつ幅のある組織へと変わっていった。1990 年代からは旧東側諸国にも事務所を置くようになり、2001 年のアメリカ同時多発テロ以降は、イスラム世界との対話を重視するようになってきている。これはドイツ国内にトルコ系の住民が多いためであり、この活動に対し近年は以前に比べて多くの予算が出ているという (ドイツにはヴェトナム系住民、イラン系知識人も多いが、彼らはトルコ系に比べドイツ社会に適応して生活しているという。トルコ系住民は人数が多く大規模コミュニティを形成しているため、ドイツ人コミュニティと積極的に接触しなくても日常生活を送ることが可能となっているといった背景がある。また、「ドイツでは差別される」という印象が根深いため、トルコの知識人はドイツではなく、アメリカや北欧に行ってしまう、ドイツ国内のトルコ系住民にとっての知的リーダーが少ないという事情もあるという)。

各国のゲーテは大きく 3 つのセクション、言語プログラム、文化プログラム、図書館から成る。ただし、国によってはこれらが揃っていない場合もある。

ドイツ語教育を担う言語プログラムは、ドイツ国内もしくは世界中のドイツ系企業で働きたい人を主な対象者としている。ユーロ危機以降、ポーランドなどを中心にドイツ語を学ぼうとする人が増えている。ただヨーロッパ全体として見れば、現状ではヨーロッパ人にとって魅力的な第 1 外国語は中国語、英語、スペイン語であり、ドイツ語は有力な第 2 外国語の位置を占めているという。今



ゲーテの一室にて。中央がレグスさん

日のゲーテにとって重要な課題であるトルコ系住民へのドイツ語教育については、あまり成功していない、とのことであった。近年予算が増えたとはいってもまだ不十分で、他の言語学校に比べ学費を高く設定せざるを得ないというのが主な原因という。ただ、これまで教育をまったく受けてこなかった人のための読み書き講座や、人権教育といった、言語教育の枠に囚われないプログラムを展開しており、受講者からは好評という。

文化プログラムの内容は、各国の状況によって大きく異なる。ただ、伝統的ドイツ文化を「輸出」するのではなく、現代ドイツにあるものを、現地の国の文化とつなげていこうとするのが基本姿勢であり、ワークショップを中心に展開している。

ゲーテの予算は外務省から出ているが、省からは独立した組織であって、省の方針とは異なる方針で活動することもある。これによって、国際政治上ドイツと関係の悪化している国においても活動することができ、例えば独裁国家の知識人に対して活動拠点を提供するといったことも可能になっている。

昼前にゲーテを発ち、ダンサーの可世木祐子さんと Nikhil Chopra さん（ベルリン自由大学国際研究所のフェローの一人）のパフォーマンスを観に行った。建物の1階の部屋で一日中行っており、鑑賞者は自由に部屋の中に入ることができ、パフォーマー側から鑑賞者に対して何かしら働きかけられることもある。さらには部屋の外に出て路上でパフォーマンスを継続する（このときは巨大な紙やテープを身にまとい踊るといったもの）こともあり、道行く人から「彼らは何をしているのか」と尋ねられることもあった。そのように、街にとって異質な人への関心を引き起こすことが、このパフォーマンスのコンセプトの一つという。〔寺田〕



部屋の中。左が可世木さん



左が可世木さん、中央がNikhilさん

#### ■9月22日（木）

自由行動日。ローマ教皇ベネディクト 16 世がベルリンを訪問しており、ウンター・デン・リンデンにはバチカンの旗が立てられ、空港方面は警備強化で混乱していたようである。また、藤野教授宅でウィーン国立歌劇場管弦楽団チェロ奏者ヘーデンボルク・直樹さんに会う。〔寺田〕

■この日は、Ballhaus Naunynstrasse で行われるカフェを巡ってパフォーマンスを見るイベント“Kahvehane Reloaded”に参加。劇場の前に小さな出店ができており、チャイやプレッツェルを売っていた。15分おきに5名ほどが1グループになってここからスタートする。16時から4人のドイツ人とクロイツベルクの6つのカフェを巡ることになった。年齢層は、20代の女性二人と、中年の男性、年配の女性。

まず、ひとつめのカフェでは、ドキュメンタリー“All we need is education”を鑑賞。移

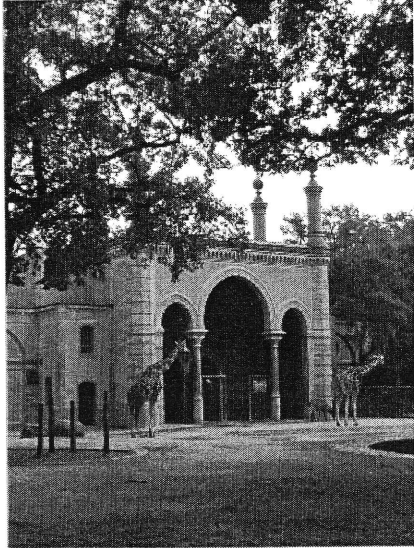
民系の高校生が、歌のワークショップを通して、自分たちの夢などを語る内容であった。映像後に、実際に6名ほどの学生が登場し、歌を披露してくれた。同じグループの若い女性は号泣。次に訪れたのは男性しか入れないギャンブルの喫茶店である。麻雀のようなゲームでかなり店の中はにぎわっていた。その店の別室で、年配の1世のトルコ人男性2人が、日常生活を演技し、ダンスを披露。その後は、質問タイムが設けられ、ドイツに渡ってきた時の苦労などを語ってくれた。また、このような場にドイツ人が足を運ぶことはほとんどないが、ぜひドイツ人にも来てほしいと思っていると言っていたようだ。3つめもギャンブルの喫茶店だが、ここにはスロットマシンもあった。5人のうち私だけがスロットに案内され、音楽プレーヤーを渡され、英語でアラブ系の人ドイツに渡り、ギャンブルに落ちぶれてしまった人生について聞かされた。スロットの使い方がわからず、茫然としていると、隣の台でプレイしていた人がボタンを押してくれる。彼が、このイベントの関係者なのか、それとも一般客だったのかはわからない。後の4人も、カードゲームをしながら、音声を聞かされていた。4つ目は、Kottbusser Tor 駅を出てすぐの集合住宅の中にあるカフェ。トルコ音楽の演奏を聞きながら、クロイツベルクについてのクイズが出題された。その後、カフェの外に飾られた写真を見ながら、クロイツベルクやトルコ系の歴史について説明してくれた。5つ目は再びギャンブルで、短い映像を見せられた。“gegen die wand”というファティ・アキン Fatih Akin の映画と同じ名前の映像で、女性がギャンブルをするかしないかで葛藤するというような内容に見えたのだが、ドイツ人でもよくわからなかったようだ。そして、最後は普段はギャラリーらしいところで、トルコ人ではなく白人のドイツ人がギャンブルをしていた。そこに私たちも巻き込まれる。次第に雰囲気が悪くなり、喧嘩に発展し、口論が始まる。すると、全員脱ぎ始め、全裸で大合唱。他の喫茶店では、一般人の客もいたが、ここでは全員が俳優。

その後、参加者にどうしてこのイベントに参加したのか聞くと、普段トルコ人のコミュニティに入っていくことは難しいため、この機会を利用してみたいと思ったようだ。ドイツ人はトルコ人について知りたいと思いながらも、その中にどう入っていったらいいのかわからないようだ。トルコ人側にも、ドイツ人を受け入れようという人もいることも確かなのだが、お互いに関わりたいたいと思いつつも、拒まれることを恐れ、なかなか踏み込めないという現状が見えた。

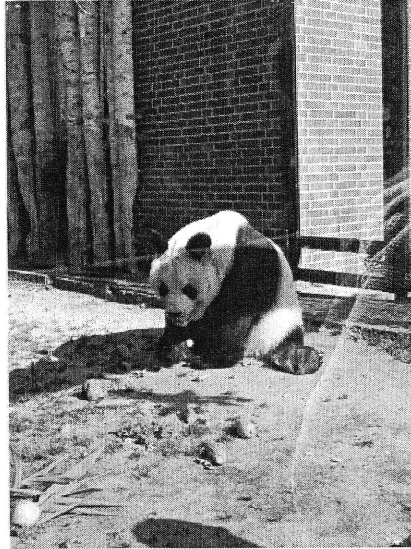
このイベントをきっかけに、お互いに興味を持っているということは伝わったと思うが、その後、実際に彼らの間に新たな関係が生まれることは、おそらくないだろう。確かにイベントにより、一回はトルコ人社会の中に入ることはできても、それは一過性でしかない。このイベントは、トルコ人の生活をドイツ人に紹介するというような形であったが、イベント後もお互いに関係性を築けるようなものにしなければ、せっかくの機会がもったいない。このイベント自体は非常に興味深いものであったが、回数を増やす、規模を大きくする、見せ方を変えるなど、何かその後につながるような工夫をしていくことが重要であると感じた。〔伊藤〕

■喜多とベルリン動物園・水族館に行った。有名な観光地であり入場料は20ユーロで少し高い。2館を4、5時間かけてついに完走。日本の動物園と水族館とはまったく異なる。(1)敷地の広さは常識的動物園の範囲を超える。日本で人気のあるパンダやペンギンはこちらでは人気が無い。ライオンやカバなどの大型動物に反応するドイツ人が多い。(2)ペンギンなど、日本では水族館で飼育されることが一般的な動物も、ベルリンではすべて動物園で飼育されている。(3)動物の生息地に合わせて、その地方の建物が建てられる。(4)ベルリン水族館は魚のほか、昆虫や爬虫類なども飼育している。アリヤカエルなどのアジア・熱帯生物は人気ものらしい。

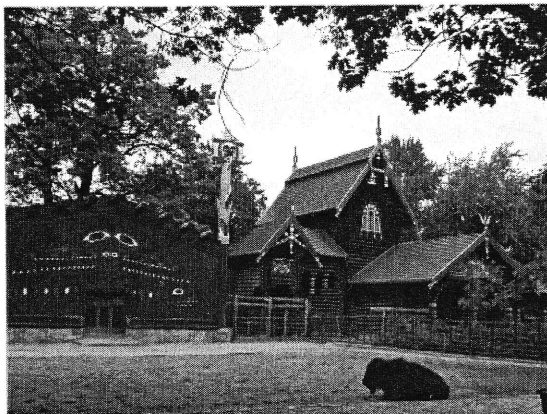
(5) 8月28日に訪問した植物園と同じく、歴史的に世界中のものを全てベルリンに集中させようとしてきたドイツ人の執念がわかった。(6) 日本の動物園や水族館には恋人同士のデートスポットとしての側面があるが、ドイツでは児童の学習の場所、家族で出掛ける場所としての性格が強い。〔陳〕



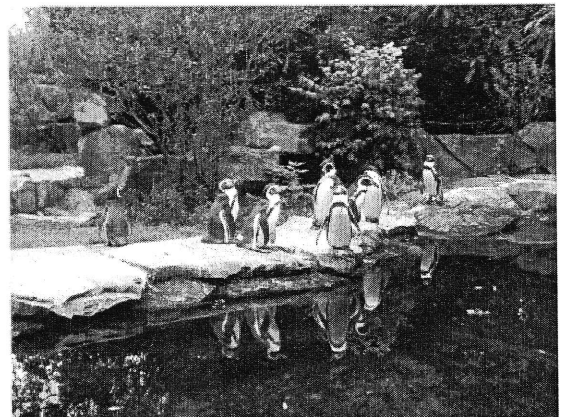
中東風の建物とキリン



笹ではなく人参や果物を食べるパンダ



南米風の建物



水族館ではなく動物園で飼育されるペンギン

### 9月23日(金)

■7:30まで寝るつもりだったが、7時過ぎに起きた。パン屋さんに出かけ、8:55まで、昨日の自分の行動の記録を、小型パソコンのワープロでとる。今日はラテ・マキアートを頼んでみた。8:20頃に家を出たのに、着いたのが8:30になってしまったのは、火曜日と金曜日にヨハニスブルガー通り *Johannisburger Str.* からリュードスハイマー通り *Rüdesheimer Str.* にかけてやっているマーケットについつい寄ってしまったからだ。グーテンモルゲンと声をかけてくれたおばさまからパンを買った。源氏パイが大きくなってチョコがかかったようなパンと、プレーンな小型のパンの2つで1,4ユーロ。いつも行くパン屋の値段を考えると安い！私が「ヴィツァインス…ディス！（Bitte eins...this! これください）」などと英語まじりの変なドイツ語で注文すると、「アインツ〜ね」、とそれぞれのパンの名前をきちんと復唱してくれた。プレート

を見てもうまく発音できないのがもどかしい。ベルリンのお店の人は、みんながみんな愛想が良いわけでもないけれど、だからといってパリのように不機嫌でもないので、話せなくても開き直って積極的にお店やらマーケットやらに行った。これは1人では、あるいはごく短期の滞在ではできなかったことだと思う。パン屋のおばさまに、明日日本に帰らなければならない、でもまたベルリンに来たい、と一方的に話した。自分に話していたのかもしれない。彼女は、優しい人だったが自分からばくばく話すようなタイプではなかったからだ。

9:00 にリュエスハイマー・プラッツ駅集合。先生の友人でチェリストのヘーデンボルク直樹さんも一緒に地下鉄に乗る。彼は北斎展を観に行くと言ってそのまま乗っていったが、私たちはハイデルベルガープラッツ Heidelberg Pl. でS線（地上線）に乗り換え、テンペルホーフ Tempelhof まで行き、U6（U線は地下鉄）に乗り換えてフランツオーグツシェ通り Französische Str. で降りる。駅を上がるとすぐにコーミッシェ・オーパーだ。

そうして9:30 過ぎにコーミッシェ・オーパー着。10時から、制作中の『利口な女狐の物語』の稽古が始まる。今日は演出のアンドレアス・ホモキ Andreas Homoki 氏は不在らしい。彼がいなくても、菅尾さんがいれば現場が回るようになっている。彼は全て演出を頭に入れている。したがって、今日は演出に関しては全て菅尾さんが指示を出す。しかし実際は指揮者の進行で稽古が進むので、菅尾さんが指示を出していたのは主に稽古が始まる前だった。ドアの開け方などを役者に教えていた。稽古が始まると、彼は1階席の後方に机代わりにする大きな板を置いて座り、スコアや書類を広げて稽古を見ている。他のスタッフも稽古を見て、おそらく自分の担当の箇所が出来具合をチェックしている。

劇場は、つくりは豪華だが丸みを帯びているからか圧迫感が少ない。何より、円形の客席は客としては観やすい。四角いと、側面に座ったときに身体も眼も疲れるからだ。先日ベルリナー・アンサンブルで『三文オペラ』を観たときは、7ユーロの安い席だったが、かなり視界がさえぎられた。あるいはコンツェルトハウスの大ホールは、つくりがとても豪華（じゃらっとした感じの装飾だった）なことに加えて箱としても収容人数も多く、天井も高く、少したじろいだ。

稽古は第3幕第2場から始まったようだ。森番と男性のシーンだ。初めに、森番が寝転んだまま舞台がぐるんと転換したので驚いた。転換を暗転することなく客に見せる（魅せる？）のは私は日本で観た事がない。舞台奥にある両開きの扉で各舞台（おそらく全部で3つ）はつながっており、扉の外（3つの舞台が回っている中心）は森という設定のようだ。舞台が回って袖に吸込まれて行った門番は、また扉の奥から出て来た。

指揮者はどこの人なのだろうか、英語とドイツ語をほとんどごちゃまぜに話している。初め英語を話し、次のセンテンスからドイツ語に変わったこともあった。とすると楽員は、少なくとも2カ国語についてバイリンガルなのだろうか？

休憩に入った。オーケストラは出て行く。歌手が演出（助手？）たちに駄目だしを受けている。もちろん菅尾さんも加わっている。主役級の歌手には1人に対して1人演出がつくものらしい。先生によると今の出来は7割くらいで、オケと歌を初めて合わせたくらいではないかと仰っていた。今日はホモキ氏がいないので指揮者中心＝音楽中心に稽古が進んでいるが、彼が居れば演出中心に進むらしい。また、「一仕事 Dienst」は3時間だそうだ。その中で、キリの良いところで休憩が入る。今日は、10時からだったので1時間15分くらいで休憩となった。

11:40 頃から練習が再開する。第3幕第3場、つまり最後の幕場のような。かえるの被り物をした歌手が歌い、森番の家のみんながびっくり仰天するという感じで、たいそうな感じもな



く、軽めに終わったなと思っていたが、先生によるとまったく進んでおらず、ずっと 1 場で、女狐が射殺されるシーンまでもいっていないということだった。

2 階席最前列にいるが、手すりになっている小さい棚に字幕らしきデジタル液晶パネルを発見。ドイツ語と、英語と、フランス語と、トルコ語で「ようこそコーミッシェ・オーパーへ」、とテストの文章が出てくる。もしかして、言語を選ぶことができるのだろうか？こうした個人に対して出る字幕というものが初めてなので、ハイテクで驚いた。先生によると本番は、「ーさん、お越しいただきありがとうございます」という内容が流れる席もあるらしい。それが 2 階の私たちが座っていたような観やすい席だとか。そういった席は、医者や議員、社長などのお金持ちが年間を通して買っている席で、彼ら自身も来るし、家族や親戚、同僚が座ったりもする。意外にも、そういうパトロン式のオペラハウスはドイツでは珍しい（アメリカに多いのだそう）。お金のない劇場だから大変なんだよ、と先生は言う。

13 時前まで 2 階席で稽古を観た。12 時くらいからだろうか、森番が 1 人で演じる比較的単調なシーンで不覚にも眠くなってしまった。音楽もよく止められて進まない。そのうちに先生が、劇場スタッフがお昼になる前に食堂でお昼を食べてしまおうと行ってくださったので、みんなで 1 階の右裏手にある職員食堂へ行く。5 ユーロほどで魚のセットを頼むと、魚のフリット？とふかしたじゃがいもとトマトソースの豪快な料理が出てくる。11:15 の休憩あたりでお腹が空きすぎて、朝買ったパンを一つ食べてしまっていたので、魚とじゃがいもを少し残してしまった。食べ終わってお手洗いにいこうと、よくわからないのでまた表に出て 3 階客席のトイレに行くと（それもわからなくて人に聞いた）、帰りに迷ってしまった。生来方向音痴なので、あの独特の怖さが走った。スタッフでもないのにうろろうろしている変な人だと疑われるのも嫌だった。でも勝手を把握していないことが、少し楽しい気もした。

14 時頃だったのか？菅尾さんが食堂に降りて来てくれて、そこから館内を案内してくれる。結局私たちは 16:30 くらいまでコーミッシェ・オーパーに居た。彼はずっとお昼も食わずに案内してくれて申し訳なかったが、「いつものことなので」と言っていた。演出の仕事の忙しさを垣間みた気がした。

16:30 にみんなとコーミッシェ・オーパー前で別れ、わたしは北斎展に行く。ブランデンブルガー・トア **Brandenburger Tor** からアンハルター・バンホフ **Anhalter Bhf.**まで S1 で一つ南へ。マルティン・グロピウス・バウの北斎展はなかなかの盛況だった。みんな熱心に北斎の絵や版画に見入っていた。疲れていたのだからと観ようと思っていたがなかなかのボリュームで（440 点と聞いている）、結局美術館を出たのは 18 時前だった。22 ユーロのカタログを買うと財布がさみしくなった。S1 でシェーネベルク **Schöneberg** まで南に行き、リング（S 線の環状線）の時計回りに乗り換えて **Heidelberger Pl.**、それから地下鉄に乗り換えて **Rüdesheimer Pl.**に帰って来た。

帰って、メンバーのみんなと一緒にご飯を食べる。パッキングを済ませて今書いているが、もう夜中の 1 時近くである。ベルリン最後の夜だ。[橋本]

9月24日(土)

■筆者は風邪を引いていたので活動的にフィールドワークを行うことはできなかった。しかし、20時から行われた、ベルリンの観光名所でもあるベルリナー・ドームで行われた教会コンサートへ赴いた。本項では、その模様と考察を述べたい。

プログラムのタイトルは《Chattin's With Bach》というものである。トランペット、打楽器、オルガンのコンサートである。チケットは学生割引で8ユーロであった。(正規の値段は忘れてしまったが、30ユーロぐらいしていたと記憶している。) 1,000人ほど入る大きなドームであったが、その日の客は300人ぐらいであった。気軽な服装で、観光客も多くいるように思えた。また、日本人か韓国人らしき学生もいた。多くが、カップルや夫婦で来ており、年齢にはばらつきがあった。

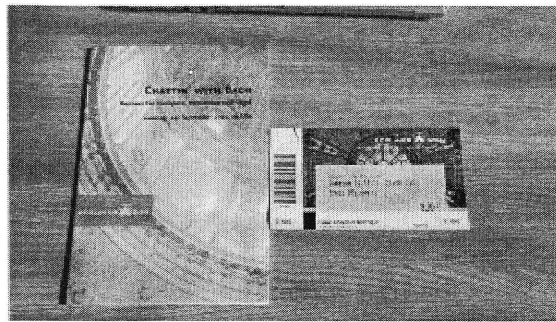
バッハに注目した演奏会だと思っていたが、どうもこのトランペット奏者は、

JAZZが専門らしく、教会に似つかわしくない強いアクセントとストレートな音を得意とする者だった。緊張しているのかは分からないが、音程が合わない他、音を外すことや音の入りもクリアではないことがあった。演奏技術に長けているとは決して言い難い。音楽面に関しても、人を感動させられるような演奏ではなく、自由さに欠ける。ジャズバーで吹くような息遣いで、決して場にあった音楽ではない。それでも、人をあっと言わせることのできる奏者も中にはいるだろうが、そのような演奏者ではない。音楽も技術も中途半端だ。

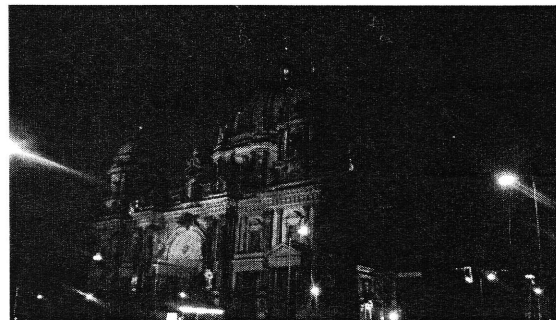
オルガン奏者のレベルも決して高いものではない。技術不足から、テンポが安定せず、楽譜どおりに弾けていないこともある。しかし、2番目のプログラムでオルガンのソロにあたるバッハの《Passacaglia》は、聞ける演奏だったのでよしとしよう。ただ、音が連続せず、切れていく奏法がすこし気になった。

あまりのひどい演奏に筆者は途中で演奏会場を後にした。帰宅後、藤野教授に報告をすると、この教会の演奏会は観光客目当ての演奏会であるということであった。

芸術による観光政策は、世界のあらゆる都市で繰り広げられている。アジアで言えば、シンガポールがその顕著である。ベルリンも例外ではない。現在、ベルリンは、美術館を博物館島に集約することを進めており、芸術による都市政策に力を入れていることが伺える。芸術を観光資源にすることは、たしかに経済効果を伴う。しかし、今回のような観光客目当てで、質の低い音楽を提供することは、都市のレベルを下げるのではないだろうか。もし、そのような政策を立てるならば、表現の自由を保障しながらも、ある程度の管理システムやライセンスシステムが必要なのかもしれない。〔南田〕



パンフレットとチケット



ベルリナー・ドーム外観

9月25日(日)

■フィルハーモニー・室内楽ザールで15:30から16:40まで行われた、子どものためのコンサートの模様を報告する。

演奏は、ウンター・デン・リンデン室内オーケストラ Kammerorchester Unter Den Linden、指揮はアンドレアス・ピエール・カーラー Andreas Peer Kahler が務めた。プログラム内容は、5歳以上の子どもを対象とし、プロコフィエフ作曲の《ピーターと狼》であった。チケット料金は大人15ユーロ、子ども8ユーロである。フライヤーによると、月に1回行われる継続的なプログラムであるらしく、10月は《魔笛》、11月は《ピノキオ》が選曲されている。

この子どものためのコンサートで注目すべき点は、以下の3点である。第一に、「演奏者—聴衆(子供)」が対等な関係を作れるよう舞台と客席という二分割された空間を演出によって取り壊し、参加型のプログラムを組んでいたことである。たとえば、コンサートが始ったばかりの時に、指揮者がノンバーバルで、子どもたちに「楽器と一緒に演奏しないかい」という態度で打楽器を持ちながら、客席に近づいてくる。すると、子どもたちは積極的に舞台へと行き、15名ほどの子どもたちが曲に合わせて思いのままに楽器を演奏していた。

第二に、原曲を子どもに聴かせるだけではなく、子どもの興味を引くようにJAZZ風に編曲したうえで、その曲にまつわる知識を提供することである。この演奏会では、《ピーターと狼》のモチーフを用いたJAZZ風に編曲し、モチーフの説明を行っていた。

第三に、子どもを飽きさせないように、一つのコーナーが15分ほどで終わるように構成しながらも、各コーナーは《ピーターと狼》にまつわる話や曲、クイズで統一されていた。日本で筆者が調査あるいは実際にトランペット奏者として参加したものは、全く違うものである。日本の場合、テーマコンセプト(たとえば「バレエ音楽を聴こう」など)に沿った選曲が行われるものの、小曲を組み合わせた音楽会であり、曲を深く知ることができない。この差異は重要なテーマであると思う。

ちなみに、終演後は、打楽器、弦楽器、管楽器のコーナーに分けられ、楽器体験プログラムが組まれていた。特に興味深かったのは、打楽器の体験コーナーである。主にボンゴのような楽器で、チーフとなる女性が子どもの作る円形の中に入り、ノンバーバルで合奏を促す。即興とは思えないほど、息のあった合奏になっており、圧巻であった。統率を行っていたスタッフのスキルの高さに驚きを隠せなかった。[南田]



フライヤー



ホルン体験をする子ども

9月26日(月)

■ベルリン・ドイツ交響楽団(以下 DSO と略す)のカジュアルコンサートの模様について述べる。

DSO は、兵庫県立芸術文化センターの音楽監督である佐渡裕が客演でよく訪れている交響楽団であり、1946年に、西ベルリンのアメリカ軍占領地の放送局のオーケストラとして設立された。1956年にはベルリン放送交響楽団と改称、通称はリアス(RIAS)オーケストラとして親しまれてきた。

さて、本題に戻そう。9月25日20時半より行われたカジュアルコンサートは、「カジュアル」と名乗りながらも、プログラムには、日本ではあまり演奏されないシューベルト作曲《ラザロ》が選ばれていた。ソリストには、ソプラノにマリス・ペーターゼン Marlis Petersen、サンドラ・トラットニッグ Sandra Trattnigg、マルティナ・ヤンコヴァ Martina Jankova、テノールにスティーブ・ダビスリム Steve Davislim、ワーナー・ギューラ Warner Gura、バスにジェラルド・フィンレイ Gerald Finley を迎え、指揮はインゴ・メッツマッハー Ingo Metzmacher が執った。コーラスは、エルンスト・ゼンフ合唱団 Ernst Senff Chor Berlin であった。

DSO のカジュアルコンサートの特徴は4点ある。第一に、出演者は皆私服であること。第二に、座席券を設けず、自由席であり、チケットも15ユーロ(学生10ユーロ)と通常のコンサートよりも安く設定していること。第三に、指揮者は指揮のみに徹するのではなく、モデレーターとして解説を演奏前に交えることである。第四に、演奏会の後は、ホワイエで Jazz 音楽を聴きながら、軽くお酒を飲むことができるように、軽食とドリンクが用意されていたことが挙げられる。

前者三点に関しては、このようなスタイルは関西でも定着しつつある。しかし、子どものためのコンサートやマチネ演奏会に見られるのであって、平日夜、ましてや通常の演奏会より30分遅くスタートするものは観たことがない。では、果たして、このような演奏会を関西で開催して成功するのだろうか。

何事も新しい企画をしてすぐに結果が得られるものは少ない。大阪フィルハーモニー交響楽団が、「お昼に本格的なコンサートを」というコンセプトのもと3年前よりマチネコンサートを年に2回開催しているが、定着するまでに3年の月日が必要であった。この演奏会の場合、観客は、他の演奏会と変わらずお年寄りが多かった印象を受けたが、働き盛りの世代も見受けられたのは確かであり、7~8割の席が埋まっていたと記憶している。定着すれば、一定の効果が見られるのかもしれない。このような平日の晩にカジュアルなコンサートを行うのも、顧客開拓の戦略方法としては必要なことだと筆者は思う。〔南田〕



パンフレット



混み合うロビー。普段のコンサートとは違い、ジャズバーのようにブルーや紫の照明が当てられ、鮮やか

## 9月27日(火)

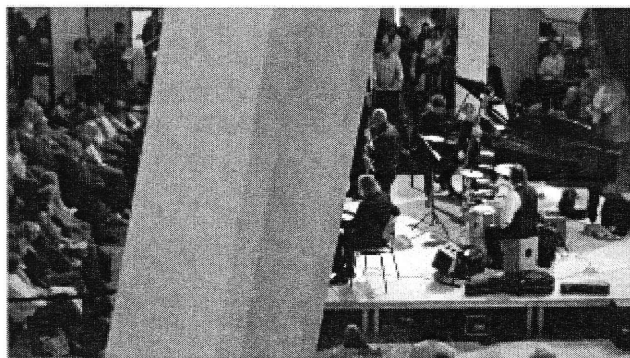
■9月27日は以下のようなスケジュールでフィールドワークを行った。

- ・13時～14時 ランチタイムコンサート@フィルハーモニー
- ・14時～16時 州立図書館での調べ物
- ・16時～18時 絵画館 Gemäldegalerie
- ・20～22時 クラリネット5重奏演奏会@ハウス・アム・ヴァルトゼー

ランチタイムコンサートの模様について報告を行う。まず、概要であるが、ランチタイムコンサートは、火曜日の13時から1時間、フィルハーモニーのロビーで行われている無料コンサートである。筆者は、9月27日のほか13日の演奏会にも赴くことができた。13日の演奏会の演目は、ピアノフェスティバルに合わせて、カナダ出身のヴァイオリニストとピアニストの演奏会であった。一方、27日に行われたコンサートは、ヴァイオリン、クラリネット/サクソ(持ち替え)、ベースエレキギター、ドラムセッション、ピアノで構成された Ensemble BELERO Berlin と名乗る室内楽集団が演奏にあたった。この団体は、クラシック音楽集団ではなく、ピアノソラやボサノバを得意とするジャズバンドで、以前にランチタイムコンサートに出演をしたことがあるとプログラムの団体紹介に掲載されていた。

次に、来客者について詳述しておきたい。ロビーに設置された舞台の前には、ハンディキャップの人のための椅子が126席並べられている。老人ホームからの団体客が13日も27日も見受けられた。また、この演奏会には、通常の演奏会とは違い、観客年齢層が若く、多くの学生のほか、意外に背広姿の観客も見かけられた。欧米系の人ばかりではなく、アジア系やアラブ系、トルコ系の人も来場していた。また、ベビーカーを押した母親集団もいた。目視で700名ほどの観客が来場しており、この数字は13日も27日も変わりはない。特徴ある女性が13日、27日も来ており、ランチタイムコンサートの固定客がある程度存在すると筆者は推測している。

二回のランチタイムコンサートのフィールドワークを通して、考察したことがいくつかある。まず、毎週違うジャンルの音楽を提供することで、飽きないプログラムとなっており、固定客にとっては様々な団体や音楽を知る契機となっていると予測される。言い換えれば、フィルハ



ランチタイムコンサート



ランチタイムコンサート終演後の様子。舞台前にハンディキャップ席が設けられている。その他は階段や床、ロビーの長いすに座って鑑賞する

ーモニーは、市民の音楽情報源として機能していると考えられる。第二に、このホールは「クラシック音楽の殿堂」であるが、ランチタイムコンサートは、ただクラシック音楽の、またはフィルハーモニーのファンを開拓をしているというよりも、むしろ、新たな種類の音楽ファンを創っていると考える。それも、年齢制限を設けず、乳幼児からお年寄り、ハンディキャップの方まで包括して行われるランチタイムコンサートは、日本のランチタイムコンサートのような「お客様の新規開拓」という意味ではなく、福祉的活動としての意味の方が強いように感じた。〔南田〕

### 9月28日(水)

■音楽科カリキュラムがどのように組み立てられているのか、特に鑑賞授業において、どのような作品が選ばれているのかを調査するために、ベルリン芸術大学へ赴いた。なぜ、そのようなことに興味があるかという点、筆者は、音楽団体におけるエデュケーション・プログラムについて興味を持っているからだ。調査方法としては、教科書を用いることがベストなのであるが、見つけることはできなかった。そこで、ショット Schott 社が出版している学校テキストの補助となる以下の雑誌を参考にした。ちなみに、この雑誌は、1～6年までの小学生の分と5～13年までの中学生以降の分に別れている。

- ・ Musik in der Grundschule: Zeitschrift für den Musikunterricht in den Klassen 1-6
- ・ Musik & Bildung Zeitschrift für Musik in den Klassen 5-13

この雑誌は、日本で言う音楽之友社出版の『教育音楽』のような雑誌である。日本の『教育音楽』も小学版と中学・高校版の2つに分かれている（音楽之友社 HP <http://www.ongakunotomo.co.jp/> 2011年12月27日閲覧）。

筆者は、どのような鑑賞教材が使用されているのかを、図書館にあったバックナンバーから調べ、下記の表にまとめた。

雑誌	出版年	対象学年	鑑賞教材作曲家	特集
Musik in der Grundschule	2006.2	1から5	モーツァルト	
	2007.1	1から5		電子楽器やカノンについて
	2007.3	1から5		民族楽器
	2011.1	3から6		シンフォニーオーケストラクイズ
	2007.4	1から5	ハイドン	
Musik & Bildung	2008.2	7から13	ジョン・ケージ	
	2008.3	7から11	リスト	
	2008.9	7から13	マーラー	
	2009.1	7から12	《カルメン》	
	2011.3	8から13	《ドン・ジョヴァンニ》	ラップ、ポップ、ビートルズ

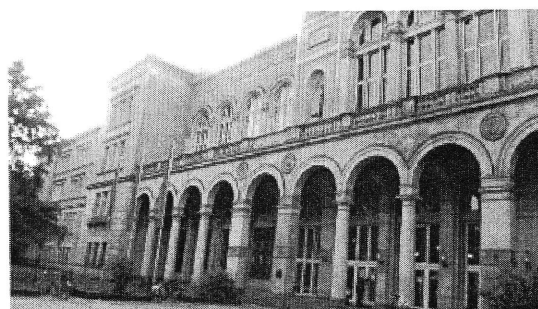
小学校課程では、小学校高学年からオーケストラについての概要説明が始まると共に、教える作曲家もハイドンやモーツァルトと言ったメジャーな作曲家が中心であることから、日本の鑑賞教材の差異はあまり見られないと予測した。

しかし、中学校課程の鑑賞教材は、日本と様相が違うように感じられる。オペラ鑑賞に加え、マーラーやケージと言った不協和音を用いる作曲家たちを紹介するようである。日本では、ケージやマーラーは、高等学校教育課程のカリキュラム内容であり、音楽は芸術科目の選択肢の一つであるから、これらの音楽に触れずに卒業する生徒もいる。

では、なぜ、中学校の課程でケージやマーラーといった作曲家を取上げることができるのか。その問いの答えを見つけるためには、カリキュラムで教えられる作曲家とその解説だけの比較ではなく、教育方法やオペラハウスやオーケストラと言った音楽関連施設によるエデュケーション・プログラムと学校音楽教育との関係に主眼を置き研究する必要があるだろう。〔南田〕



ベルリン芸術大学前の標識



ベルリン芸術大学のエントランス



音楽教育雑誌『Musik in der Grundschule』

### 9月29日(木)

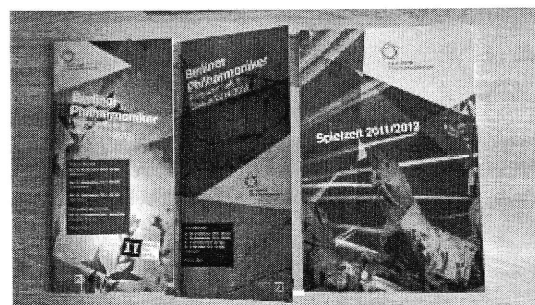
■次の日は、出国予定日であったので、以下の予定でこの日は過ごした。

朝：荷物整理、部屋の掃除など出国準備

昼：教授の手伝いで、フリージャーナリスト中村真人氏の御宅へ。その後、サロンコンサートや朗読会が行われるカフェで昼食。

夜：ベルリン・フィルハーモニーの定期演奏会（フィルハーモニーにて）。

中村氏は、NHKのドイツ語講座を担当されている方でもある。「NHKの番組は、よくできている」と感じていた筆者は、中村氏に



ベルリン・フィルのパンプレット。

（左）9月第2週目（筆者訪問日：9月17日）の定期演奏会。（中央）9月第4週目（筆者訪問日：9月29日）の定期演奏会。（右）2011 / 2012年シーズンのパンプレット

どのように番組制作をするのかなどを質問した。撮影クルーなどは、ドイツ側の人らしい。また、思っていた以上に、放送日より前か前に撮影をしているようだ。

さて、本稿では、この日行われたベルリン・フィルの定期演奏会について詳述しておきたい。ベルリン・フィルの定期演奏会は毎週あり、3日間（「木・土・日」か「金・土・日」のパターンで）行われる。頻度の高い定期演奏会と筆者からみるとかなり充実したエデュケーション・プログラムを行えるのは、年間約50億円もの補助金が州から支払われるからであろう。

ベルリン・フィルの演奏会では、多くの日本人観光客と留学生を見かけることができた。その次に多いアジア人は、韓国人留学生である。韓国の「文化芸術予算1%政策」の力強さを感じられずにはいられない。アジアの中で、これからの日本は、果たして文化芸術分野においてイニシアティブをとっていけるのだろうか。

余談になってしまったが、プログラムの内容は、マーラーMahler作曲《交響曲第1番》がメインで、前半のプログラムには、ゴットフリードGottfried作曲《オーケストラ・ムジーク》という現代曲とシューマンSchumann作曲《チェロとオーケストラのための協奏曲》が演奏された。指揮は、ズービン・メータZubin Mehta、チェロはヨハネス・モーザーJohannes Moserが務めた（ちなみに、パンフレットは2ユーロで売られている）。

筆者は、マーラー生誕150年記念であった昨年に、ズービン・メータとイスラエル・フィルの演奏を大阪のザ・シンフォニー・ホールで鑑賞したことがある。その際のメータのマーラーの音楽は、大阪フィルの音楽監督である大植英次のような指揮者の個人色が明瞭な音楽ではなかった。しかし、楽譜に忠実に従った音楽であるという好印象を持った。今回も、メータのマーラーの《交響曲第1番》に対する解釈は昨年とさほど変わりはない。しかし、ベルリン・フィルの団体独自の音楽の解釈と音色とがうまく相まって、イスラエル・フィルとはまた違った、華やかでかつ迫力のある演奏となっていた。ただ、惜しいと思うことは、ベルリン・フィルの金管セクションである。たしかに、他のオーケストラに比べれば、技術、音色ともに飛びぬけているが、カラヤン時代のように突き刺すような金管の音とその華やかさは欠ける。だが、今のベルリン・フィルは、当然のことながら、当時のベルリン・フィルとはまた違った味を出しており、オーケストラとは変化していくものだとも再認識、「生き物」であると感じた。

オーケストラという「生き物」をどう育てるのか。ボウモル&ボウエンが言うように補助金による「芸術支援」が必要である。大阪のオーケストラは、非常に苦境にある。筆者は、大阪生まれの芸術を支える身としてどのように貢献していこうか、と改めて自問自答した。〔南田〕

## 9月30日（金）

■ベルリン滞在最後の日となった。教授は朝一番の飛行機で帰国された。ミュンヘンへ向かう三宅氏とも朝7時に別れた。筆者の飛行機は夕方便だったので、15時に家を出れば間に合う。そのため、朝7時半からクロイツベルクを散策し、11時から開演するコーミッシェ・オーパー・ベルリン（以下KOBと略す）の子どものためのコンサートへ赴くことにした。

クロイツベルクについては、伊藤の研究ノートを参照されたい。しかし、一言だけ筆者の所感を添えるならば、思っていた以上に安全な街なのかもしれないと感じたことだ。大阪のアメリカ村のような雰囲気がある。一步路地へ入ったならば危険が待ち受けているのかもしれないが、筆者がガイドブックに沿って歩いたコースは、大阪の街のような「ごみごみさ」があり、むしろ懐かしいにおいがした。



さて、KOB の子どもためのコンサート (Konzerte für Kinder) は、月に一回開催される。平日に開催される場合は、幼稚園や小学校のクラスのために開かれるが、もちろん個人客にも開放されており、ベルリンの無料音楽情報誌「コンチェルティ」にも掲載されている。だが、客のほとんどが幼稚園・小学校からの団体客で、個人客は本当に少なかった。ただ、ドイツ人系の幼稚園ばかりでなく、多くのトルコ系幼稚園が訪れており、そのほかにも、英語系の幼稚園、各々に違った文化背景をもつ子供がいる幼稚園なども来場していた。

この日のコンサートプログラムは《動物の謝肉祭》である。9月28日の報告にもあるように、小学校の段階までに身につけておきたいクラシック・ナンバーは日本と同じようで、このプログラムの選曲も妥当だと感じた。ただ、日本と違うことはプログラム構成である。日本のこどものためのコンサートは、「のだめクラシック」や「クラシック・ベスト100」などのCDに見られるようなもので、有名所、あるいは、教科書に載っている楽章のみを取上げる場合が多い。しかし、9月26日に行ったフィールドワークの手法と同様、「詳しいモチーフの解説+全曲」という構成が取られていた。ここには、音楽の構造美学や形式美学といった音楽学の思想が反映されているのではないかと筆者は推測している。また、曲の解説を行った教育部門長 A.K. オストロップ (Ostrop) 氏は、「舞台と客席」という空間的な垣根を越えようと、クイズ形式で曲の解説や楽器紹介を行ったり、《かっこう》ではクラリネットと一緒に「クッカー」とかっこうの物まねをさせるなど、工夫を凝らしていた。

皆に遅れて筆者は9月1日から30日までの一ヶ月の滞在であった。外国には年に数回出かけるものの、今まで一ヶ月間も海外に滞在したことはなく、不慣れなために風邪をひき、1週間ほど寝込むことがあった。メンバーをはじめ、諸先生方には迷惑をかけたと反省している。しかし、それも、海外の医療事情を知るための良い契機であった。日本では最低2万円の高値がつくベルリン・フィルを安価で何度も聴くことができた。また、シュターツカペレ・ドレスデン Sächsische Staatskapelle Dresden とティーレマン Thielemann とのブラームス作曲《交響曲1番》は、今まで聴いてきた音楽の中で一番「完璧」に近く、昇天する思いであった。

自身の研究テーマに照らしあわせた報告については他のページで詳しく述べるとするが、ドイツで過ごした30日間は人生の中でも非常に密度の高いものであったことを本稿で強調しておきたい。〔南田〕